和漢混和文の例

言、燕石雜志の類なり。

左に其の例數種を示さん。

一、淺野長政大閤を諫ひ　藩翰譜

文祿のはじめ朝鮮の事起る。同二年六月、長政彼國に渡り、石田、增田、等に相議り、諸軍勢を率して晉州の城を攻落す。ことし冬、太閤朝鮮の軍はかばかしからぬをいかつて、德川殿をはじめて、宗徒の大名を名護屋の陣に集め、朝鮮の軍今のやうおらんには、いつの事定るべしとも覺えず。今は秀吉みづからむかはんと思ふ。三十萬の勢を三手に押分け、利家、前田氏卿蒲生大將させ、三道より向ひ、朝鮮を打破り、眞直に大明に攻入らん、本朝の事、家康さへましませば、心に懸る所なし。かたがたいかにやと思ふと仰あり。德川殿御氣色損じて、利家氏卿にむかひ給ひ、日本の大名多き中にかたゝ二人撰出されて、一方の大將をたまはらん事、弓矢執て面目何事か是にすぎん。抑家康いやしくも弓馬の家に生れ、戰の道に年老ぬ。今此大事に及びて、いかで人々の跡に止りていたづらに本朝を守り候ひなん。小勢には侍るとも、家康軍勢をひきゐて必一方の先陣を承るべし。方々御推舉をあふぐ所に候と宣ひしに、彈正少弼長政すゝみ出で、しばらく候、德川殿。殿下ごの年月の御振舞昔の御心とや思召す。よく、古狐の入かはつて候を何事を宣ふべきと申るはてぬに、大閤御はかせに手を掛られ、やあ秀吉が心に狐の入かはつたるいはれ、急度申せ申損じおば、シャ首打落してくれんずと、せめ掛せめ掛け仰せけるに、彈正少弼ちつともさはがず、長政が如きは、何百人首刎られんにも、何條事か候べき。抑、此年頃よしなき軍起て、異國のみにあらず、本朝にも、父をうたせ、子をうたせ、兄弟を失ひ、夫に放れ、妻に別れ、歎き苦しむ者天下にみつ。又、それに兵粮の轉漕、軍勢賦役、六十餘州が內、悉く荒野となる。けふ御發向あらんには、翌は、五畿七道の間、竊盜、强盜蜂の如くに起りて安い所も候まじ。德川殿いかに思ひ給ふ共いかでか、是を防で、動きなく御跡守り給ふ事かなふべき。此等の事を思ひてこそ、先陣とは宣ふらめ、されば

昔の御心あらんに、かはぞの事あぞ御心付かるべき。かゝる御心のつかせ給ふ事是只事にあらず、一定古狐の入かはつたるに候ぞといかにいやしき者の諺に、人とらんとする鼈は、必人にとらるゝとは、此御事にて候ぞと憚る所なく申ければ、太閤鼈にもせよ、狐にもせよ、おのが主と頼たらんに者、雜言仕條奇怪なり」。とぞびからんとし給ふを利家氏鄕おし隔り、人々御前に伺候せり。長政が首刎られんに御手をおろさる迄も候はず。そこのかせ彈正。と云はれて、長政はさらぬ躰にもてなし、人々に色代して、おのが陣に歸り、御使を待ちて腹切らんとす。重て仰出さるゝ旨もなし。かゝる所に、肥後國に逆徒起りぬと早馬を參らす。太閤大に驚き給ひ、德川殿に御使ありて、長政俱して御參あれと仰らる。頓て長政召具せらる。太閤肥後國に逆徒起りぬ、汝が嫡子左京大夫幸長追討の使たるべしと仰下さる。長政大に悅びぬ。德川殿に向ひ給ひ、幸長いまだ年若し、本多を中務少輔忠勝なり副て給ふべしと仰らる。頓て彼逆徒、國人等討て參らせければ、軍をは出さず、長政仰を承て肥後國にむかひ、國の政を沙汰す。

## 二、折たく柴の記の序

むかし人は、いふべき事あればうちひひて、その餘は、みだりにものいはず。いふべき事をも、いかにもことば多からで、其の義を盡くしたりけり。我が父母にてありし人々も、かくぞおはしける。父にておはせし人の、その年七十五にあり給ひし時に、傷寒をうれへて、事きれ給ひあんとするに、醫の來りて、獨參湯をあむすゝむべしといふあり。よのつねに、人にいましめ給ひしは、年わかき人はいかにもありあむ、よはひかたぶきし身の、いのちの限りある事をもしらで、藥のために、いきくるしきさまして終りぬるはわろし、あひかまへて心せよとのたまひしかば、此の事いかにやあらむといふ人ありしかど、疾病の急なるが、見まゐらするもこゝろくるしといふほどに、生薑汁にあはせてすゝめしに、それよりいき出で給いて、つひに、其の病愈給ひたりけり。後に、母にてありし人の、いかに此の程は人にそむきふし給

ふのみにて、また物のたまふ事もおかりしとゝひ申されしに、されば、頭のいたむ事、殊に甚しく、我いまだ人にくるしげある色みせし事もなかりしに、日比にかはれる事もありおむこそ、しかるべからず。又世の人熱にをかされて、ことばのあやまち多かるを見るにも、しかじいふ事おからむには、と思ひしかば、さてこそありつれと答へ給ひき。これらの事にて、よのつねの事ぞもおもひはかるべし。かくおはせしかど、あはれ問ひまゐらせばやとおもふ事も、いひ出しがたくして、うちすぐる程に、うせ給ひしかば、さてやみぬる事のみぞ多かる。よのつねの事共は、さてもやあるべき。おやおはちの御事詳おらざりし事こそくやしけれど、今はとふべき人とてもおし。此の事くやしさに、我が子共も、また我がごとくの事ありおん事をしりぬ。今はいとまある身とおりぬ。心に思ひ出づるをり〳〵、すぎにし事共そこはかとおく〻しるしおきぬ。外ざまの人の見るべきものにもあらねど、ことばのつたおきをも、事のわづらはしきをもえらぶべしやは。それが中、前代の御事に



およびし事共は、ひとともかしこけれど、世によくしれる人もおきは、おのづからの傳ふる人のなからむものは、おやおはちの身を起せし事もやすからず、おやにてありしものゝ、前代の御めぐみをうけし事は、よのつねおらざりし事をも、おもひしる事もありなむには、忠と孝との道にも、たがはざる事もあり。おましと、六十の老翁散位源、丙申の十月四日に筆を起しつ。

## 大和俗訓

三、人の行ふべきこと、三あり。

凡人のつとめ行おふべきわざ三あり。願ふ處も、又三有り。一には務業、二には養生、三には行義おり。務業とは、四民共に其家のわざをつとむる也。士は君につかへ、農、工、商は、各其家業をつとめて、其衣を求むるを言ふ。家業をつとめざれば、飢寒貧窮をまぬかれず、是諸民の先つとむべき事にて、財祿あらん事をねがふ處おり。務業れば、衣食と居所を得て、身をやしおふ生計は其内にあり。二には、養生は、飲食色慾七情の内、欲をうすくし、起居動靜の形

氣をつゝしみ、風寒暑濕の外邪をふせぎ、生命を養ひて、病おく、長壽を得ん事をねがふを云ふ。生を養はざれば、必病生じて、身をくるしめ、又むまれ付たる天年をたもちがたし。是又人のよくつとむべき事あり。三には、行義は身をれさめて、人倫の道をあつく行ひ、道理にかなはん事を願ふを云ふ。義を行はざれば、人道を行ふべからず。凡務業て富貴に居り、生を養ひて、長生を得ても、人の道おくんば、禽獸にちかくしていけるかひなし。古の聖人これをうれひて、師を立て、學を立て、人倫の道ををしへ、義理をしらしめ給ふ。此三の内、務業より、養生はおもく、養生より、行義はおもし、いかんとあれば、務業は富貴をきはむるを宗とす、國を領し、高位にのぼるは富貴のきはまり也。されども、壽命おければ、富貴も用なし。たゞ今人ありて、汝に國土をゆづり、高位をさづくべし、然らば、汝が命をうばふべしとおらば、至りて欲ふかき愚なる人も、命を失ふひて、國土と位を得んと思ふ者あるべからず。しかれば、富貴よりいのちはおもきにあらずや。故に曰はく、務業より養生は重し。又君父のために、命をすつるは、云ふに及ばず、朋友とつれ立て、道をゆくに、もしむかひより、人來りて、朋友と口論したゝかはゞ、士はどの者は、其友を見すてゝにぐる人あるべからず、たゝかひて死すれども、かへりみず。又わづかなる祿を得て、君に仕ふる下部も、主人のため命をすつるはめづらしかず。是生命より、義理はおもきにあらずや。凡此三は、天下の人むまれ付て、各其心にねがふ處にして、又行ふべき當然の道也。つとめておこたるべからず。其内に、輕重ある事かくの如し。義理の生命よりも富貴よりも重く貴とぶべき事、是を以てしるべし。然れば、命をおしみて、義理を失ふは輕重をしらざる也。いはんや、利欲によりて、大なる義理を失ふはいふにをよばず。

## 四、秋の樂

秋もおかばにおりぬれば、一年をへて待ち得たる月あきらけきは、凡あめつちの間にあらびあきつゝで、ひとつの見ものあれば、よろづのうるはし

き景物は、皆、其の下あるべし。この夕、この景にあへるこそ、浮世の中の面白さも、あはれさも、殘らぬ折なれ。

年のはに、一とせの内月ごとに上の弓はりより、居まちの頃まで、そらはれぬれば、夜ごとに、心を樂しましめ、目を悅ばしむる事、さらにかずなし。ことさら三秋の間、折々のいみじき光を、年ごとに、心にまかせて見ること、まことに幸おほき此の世なり。

凡、天が下の君は、八すみをしろしめして、天地は、皆、其の領し給へる國の内あれど、いやしきわが蹤までも、あまつみそらに只ひとつかゝれる月を、己がものとして、ほしいまゝにあふぎ見るも、いとゞかしこく、身にしあまりていみじき幸あり。やどりわかず、いやしきちまたをも、同じく照せるいとめでたし。年々に月と花とをあくまで見るは、まことに思ひでおほき此の世ありといふべし。

あたら夜の月なれば、同じくは、心しれらん人と共に見んこそはいなれど、同じ心に見る人まれなれば、西行が、ひとりぞ月は見るべかりけるとよめるもうべありもろこしの人も、秋月は、俗士と見るべからずといへり。李白は、今人は古時の月を見ず。といへれど、むかし世々の人のあがめにしも、この月なれば、古人のかたみとなれるも、むかしおぼえてしのばし。

古今の人の世をさりゆくは、流水の行きてかへらざるが如し。只、月の光のみいにしへ今、かはる事なきこそ、こよなうめでたけれ。月の梧桐の上にいたり、風の楊柳の邊に來るは、心を洗ひ、興をもよほして、えもいはぬ快き折ふしなり。四時ともに、思ひ出おほき此の世なれど、取わき、秋の月は見ざらん後の世の光までも思ひやられ侍る。

## 五、士の節義

ある時の會に、古今節義の事に及けるに、翁、いひけるは、孔子、季路冉有の二子を、父と君とを弑するには不從と仰られて候。少し志あるきはの人の、君父を弑するに同意する事あるべきや、二子は孔門の高弟にあらずや、それにか

く仰らるゝ事、たゞ季氏が不臣をいまめし給ふといふばかりにあらず、是はいはれある事にて候。たゞ今刀を取て君父を弑す者ありて、我に同意せよといはむには、誰か從ひ申べきにて候。然るに、時移り勢變じて、君父たる人を殺しても、其跡あらはれず、人もさしてとがめぬやうに成行時は、已か利害にひかれて、覺悟を失ふものにて候。楊雄は、王莽が平帝を弑せしに仕へて、反て莽か功德を頌し、沈約は、蕭衍をすゝめて、和帝を弑し、その謀臣となる。さては、明の靖難の時にて見給へ、燕王は建文帝を弑せしかども、在朝の名臣蹇義夏原吉楊溥楊榮を始とし、いづれも、燕王を奉して、是に臣とし仕へざるはなし。其外歷代不學無識の徒は論ずるにたらず、是等は皆一代の文儒として、世に名をあらはす人ぞかし。是にてしるべし、季路冉有を、弑父與君には、不從との給ふは、二子大義においては見る事明かにして、慥に覺悟のたがはぬ所を、聖人見屆給て、かくの給ひける事を、實に容易の事とはいふべからず。我朝にても、源義朝が父爲義を殺すにて見給へ、其身も大



惡としらぬにてはなけれども、君命はおもし、父おがら朝敵となりたる人あれど、是を救ふ事叶ひがたし。それに、鎌田正清おどいふ無惡の輩、いろいろ拵へていひけるまゝ、あへなく是を殺してけり。彼二子は、かやうの場に至ては、たとひ身命を果しても、覺悟をたがふる事あるまじきなり。義朝さしも源家の名將と聞ゆれども、勇氣ばかりにて、義理にくらく、志節なき故に、是ほどの理非にまよひたり。いかゞして長田忠宗がおのれをころすをとがむべき。但此事は北皇親房の神皇正統紀の論正しうして、最理に當れり。此事の斷案ともいふべし。正統紀にいへるは、義朝父のくびをきらせたりし事、大きなるとがあり。古今にもきかず、倭漢にも例なし。勳功の賞に申替るとも、自から退くとも、おどか父を申たすくる道おかるべき。名行かけはてにければ、いかでかつひに其身をまたくすべき。程おく滅びぬる事は、天理あり。およそかゝる事は、其身のとがはさる事にて、朝家の御あやまりなり。よく朝議あるべかりけるに、其比名臣もあまたありしが、おどか諫

め申さゝりける。大義には滅親といふ事のあるは、石碏といふ人、其子をころしたる事あり。不忠の子を殺すは理なり。父不忠ありとも、子としてころすの道理あし。保元平治よりこのかた、天下亂れて、武威さかりに、王位かくありぬ。いまだ太平の世にかへらざるは、名行のやぶれぞかしとぞ。此時代是程正しき議論あるをきかず。さすが、親房、南朝の耆老として、此見識あるに程に此議論もあるぞかし。ちかきころ、明智光秀か、織田信長を弑せんとて丹波路より引返す時、途中にて旗下の將士へ、隱謀の企ある事を始ていひきかせ、さて一黨同心せんといふ一紙の誓文を出しけるに、軍士たがひに驚き視て、とかうの事に及ばざりしに、齋藤内藏介申けるは、此御企て千に一つも御利運あるべき事にて候はゞ、同意いたすまじく候得ども、御敗亡は見へたる事にて候、それに只今辭退いたし候はゝ、命を惜しみて、其場をはづし申にて候、それは士の義にあらずとて、一番に血判しければ、殘る、の人々も、一言に及ばず、みな同じけるとあり。孟子に、非義之義、大人弗爲と



いへり、内藏介が義は、大人のせざる所なり。此時、光秀つよく諫てきかれず、光秀の手にかゝり死なんは、中〳〵まさるべし。萬一、光秀本望を達し、永く世にあらば、内藏介いきてをるべきや、いきてをらば、前にいひたる事はひつはり、よしまた、其時自殺するにもせよ、賊黨の名はのがれ得ず、世話にいはゆる犬死といふべし。畢竟、義理の筋にくらき故に、小節に拘り、時勢に逼られて、つひに賊黨に陷り、極罪に處せられけるは、おげかしき事あらずや。

六、世の中はあひもち　たはれ草

世の中はあひもちなりと、いやしきことわざにもいへる、まことに、道にかなへることばなるべし。都ありても、田舍あければ、其國たちがたきが如く、中國ありても、夷狄あければ、生育の道普からず。藥材器用をはじめ、大事小事ともに、互にたすくる事多し。國のたふときと、いやしきとは、君子小人の多きと少なきと、風俗のよしあしとにこそよるべけれ。中國に生れたりとて誇るべきにもあらず。又、夷狄に生れたりとて、はづべきにしもあらず。愚な

る人は、ねあかうどの、ねあかうどありと人のいへるを聞きて、はぢ罵るが如く何の故もなく、その國を中國ありといはんとす、さる事にはあるまじ。

七、親子の中を和げし話　同

その子のあしきをかあしみ、朝夕切諫せし人ありしに、或人のいへるは、其身のわかき時はものごと御おやのおはせのまゝにありしかとゝへるにしばしありて、さはなくさぶらひきとてたふ、されば、こそいやしきことわざにも、年こそくすりあれと申し侍れば、としたけ給ふのちには、きづかひおばしめすほどにはあるまじといひて、その子ありし人をかたへにまねき、この、はどみちゆく人の、言葉あらそひして、としたけたるものを、うちたたきあざけしたるはあしきゝ給ふやといひしに、いかにもやすからずおぼえ侍るとてたふ。よそのおやあれば、年たけたるものゝ、うしとおもふさまはやすからぬ御事あるに、したしき御おやの、あさゆふこゝろをくるしめ給ふ事、すこしの御心づきあきこそあやしげあれといひしに、はぢがはし、

で、おにの言葉もおしそのゝちはおやとの中むつまじくおもたちとかたれる人あり。

八、盗人盗死をとゞめし事　筆のすさび

ある家に、盗よひより忍びいりて、うかゝひねけるに、夜ふけて、家内の人みな寝ねてのち、一女子ひとりおきゐて、髪ゆひけはひあざやかなるあり。丑みついまはたのまれずと、待ちわぶる者をあらひと思ふうち、さはなくて、硯をいだして、こまごまと二通の書をしたゝめて、さて薬に練をかけてみづからを盗りて、前に飛ばびとするにのぞみて、盗おばえずこゑをあげて、やゝ人人おき給へといひつゝ、抱きとゞめたり。家内の人その聲におどろきて、そのゆゑよしを問ひければ、えさらぬことありて、かくは物せしありとて、只おきに泣きぬるを、さまゝゝとときあためて、二人の人に守らせ、さてそのゝちめたるはいかなる人どといへば、盗あり。これも、おからさまに其のよしを述べければ、彼そこばくとらせて、かへしたりしとあり。又ひとの妻をぬす

る人は、ねおかうどの、ねおかうどおりと人のいへるを聞きて、はぢ罵るが如く何の故もおく、その國を中國おりといはんとす、さる事にはあるまじ。

七、親子の中を和げし話　同

その子のわしきをかおしみ、朝夕切諫せし人ありしに、或人のいへるは、其身のわかき時はものごと御おやのおほせのまゝにありしかとゝへるにしばしありて、さはおくさぶらひきとこたふ、されば こそ、いやしきことわざにも、年こそくすりおれと申し侍れば、としたけ給ふのちには、きづかひおばしめすほどにはあるまじといひて、その子おりし人をかたへにまねき、このほどみちゆく人の、言葉あらそひして、としたけたるものを、うちたたきおどしたるはおしきゝ給ふやといひしに、いかにもやすからずおぼえ侍るとこたふ。よそのおやおれば、年たけたるものゝうしとおもふさまはやすからぬ御事おるに、したしき御おやの、わさゆふこゝろをくるしめ給ふ事、すこしの御心づきおきこそあやしげおれといひしに、はぢがほしで、おにの言葉もおし、そのゝちはおやこの中むつましくおりたるとかたれる人あり。

八、盗人縊死をとゝめし事　筆のすさび

ある家に、盗よひより忍びいりて、うかゝひねけるに、夜ふけて、家内の人みな寝ねてのち、一女子ひとりおきゐて、髪ゆひけはひおどするあり。丑みついまはたのまれずと、待ちわぶる者もあらむと思ふうち、さはなくて、硯をいだして、こまごまと一通の書をしたゝめて、さて梁に縄をかけて、みづから縊りて、前に飛ばむとするにのぞみて、盗おぼえずこゑをあげて、やよ人人おき給へといひつゝ、抱きおどゝめたり。家内の人その聲におどろきて、そのゆゑよしを問ひければ、えさらぬことおりて、かくは物せしおりとて、只おきに泣きゐるを、さまくゝとときおだめ、二人の人に守らせ、さてそのとゝめたるはいかおる人ぞといへば盗おり。これも、あからさまに、其のよしを述べければ、錢そくばくとらせて、かへしたりしとおり。又ひとの妻をぬす

みかよひし人あり。ある時、その妻のもとに忍びゐたるに、その妻、青赤龍子を膾に調じて、酒をあたゝめて、本夫にすゝむ。本夫は夢にもしらで、やがて喰はむとせしを、密夫おぼへずはしりいでゝ、その膾には毒あり。かまへてな食ひ給ひそと、おしとゞめけれど、本夫おどろきて、その人のしのびゐたる事をば問ひけるに、これもあからさまにしか〳〵のよし答へしかば、その妻を追ひいたし、密夫は命のおやをりとよろこびて、兄弟の約をなしてむつびしとかや。この二事、一は西山拙齋、一は中山子幹、二子のはなしあり。人の本性ものにふれて、おぼえず發見することかゝることと世におはかるべし。

## 九、若冲居士

### 名家畧傳

若冲居士、名は鈞、字は景和、平安の人なり。もと伊藤と稱し、後、藤氏に改む。父名は源、母は武藤氏の女。享保元年二月八日、京師錦小路に生る。若冲の人となり、斷々として他の技なし。唯繪事のみを好めり。はじめ狩野氏の流れを學べり。漸、その畫法に通じ、自おもへらく、この法は狩野氏の法なり。即われこれを善くせんも、狩野氏の圈蹟を超えず、これを捨てゝ宋元の畫を學ぶにしかじ。とて、宋元の畫を臨移くこと數十百本にして、又おもへらく、かばかりの技、何ぞ肩を比すべけんや、且彼も物を描くなり、吾、又、描くところによりて描かば、これ物と一層を隔つるなり。今、親しく物につきて草を把るにはしかじ。物につきて、吾何をか執らん。氣運生動、つとめて俗を去るにあり。かくすれば、かの冒雪（唐の郎皮作る所常建吟詩王維の作る冒雪入京圖をいふ）吟詩所孟浩然が吟時の圖をもて、露紫月額編被（かたはだぬぎ）の人の態を見るにたへず。山水の見るところも亦上幅に過はず。己むことをくば、動植の類なるべし。されど、孔翠鸚鵡の類は、つねに見るべからず。唯、司晨禽は、人家、常に畜馴るゝところにして、その毛羽の彩（いろどり）五色を施すべし。吾此よりはじむべし。とて、數十の鷄を窓下に畜ひて、その形狀を極めて、寫すこと年ごろへて、後には、おのづから草木の英、羽毛蟲魚の品、その貌をつくし、その神に會し、心を得て手に應じ、その筆

を下し彩を施すにいたりては、こと〴〵く意匠もて之をおし、いさゝかも、古人の法に蹈襲るといふことなし。もし韻致かおはざることあれば、骨をり力をいれて、工を窮めて妙所にいたれり。

又白紙の滲みやすきをよろこび、好みて、墨畫をかけるに、その滲むところの濃淡の界、しかも花瓣と羽瞬とのついで、まち〳〵に態をおすこと、その運筆はかりがたきこと、暗中に摸り索むるに似たりといへども乾くに及びて、劃然とその濃淡の紊れざる、蓋、筆の至る所手に隨ひて滯らざることと及ぶところにあらず。一種の風流世にいまだ嘗て見ざるものといふべし。

人こと〴〵くその妙所に嘆服し、遂にこれをもて、斗米に易ふ。されば、斗米庵の號あり。しかれども、若冲性質直にして驕飾おく、畫事をもて當世に名を衒ることをせず、かつて、繪事に耽ることをのみ專とするからに、外物にひかるゝことをきらひて、家を弟に屬し、顧、頭かつ葷肉を食せず、妻子を畜へず、季某をもて後とせんとおもふに、はやく身まかりぬ。かゝれば、預め百歳の事をはかりて、宅地をもて、祠堂の供養とし、松鶴院に佳城をトしたりとぞ。

## 十、伊藤介亭の傳　近世畸人傳

介亭伊藤氏。諱長衡。字正藏。即通稱とす、是堀川の家風仁齋先生の第三子なり。性質篤實にすぎて魯に似たり。特に孝友ある人なり。母氏、雷を懼るゝこと人に過ぐ、故に生徒集りて講談の半といへども、空曇れば、直に辭して、其本家堀川に走ることと夏日の常なり。其他は推して知るべし。兄東涯に仕ふるもまた猶父の如し。父には幼く別れし故此兄弟皆東涯先生の教を受く弟たちは、尚少年にして、時々青樓に遊ぶ、或は朝に及びて、急に歸るに、介亭同居の日あれば早晨に起きて、あらるゝに苦しみ、或時門より入りて、急に呼んで曰く、いづこにか火事あり と、先生即、走りて、屋上に登り、是を望むまに、部屋に入りて綏らはしたり。後は是をよきことにして、朝かへるごとに、かくよばはるに、あやしむ氣色もおく、例の如く屋上に登る、奥田士亨東涯の門人にして三角と號す通名惣四郎伊勢の人いさめてい

ふ、是は令弟達のあざむかるゝあり、何ぞ常にはかられ給ふやと。先生いふ、吾これを知れりといへども、もしまことの失火ある時、例の僞りごとこゝろえてたゆみてはあしとおもひてかくするありと。また或る時、住める家の板敷を引放ちて、何やらん人を指揮す、ある書生入り來て、何ごとぞとふに、今誤りて鐵の火筯を落せり、故に是をもとむるありと、書生それは何ばかりのものにもあらず、さあがら捨て給ふがよし、さわがしといへば、否此ものををしむにはあらず、此家は人のものなれば、我にかはりて、住む人あらんに、板敷を踏落し、此火筯にて傷んことをおそるゝ故に、かくするありと答ふ。後子を養ひて嗣とするに、既に長じたれども、小兒のおもひをあし、堀川の岸を過ぐる時は、後より手をあつる如くして是を護る。人見て怪むばかりありとおん。またかしきとは、年比、召使はれし一奴、甚だ愚直なるものあり。或日鯰を切らしむるに、是は、庖丁をねさせて切るべしと教へたるまゝに、其日は事に紛れて、明の日、如何に昨日の鯰は切りたるやと問はる。奴いま



た寐させたるまゝにて、おこし侍らずといふがあやしさに見れば、割木を枕とし布巾を打きせ置きたり。又鯛の頭の切りたるを炙らしむるとて、頭は角に掛べしとありしに、やがて繩にてつなぎ、屋の角に掛けたりし。先生、奴はかくのごとくなるがよしとて、それを生涯愛してつかはれしとおん。高槻の儒臣たりしかど、京師に住みて終る、嵯峨の二尊院先塋の側に葬れり。

## 十一、言葉石　東遊記

予が越前國敦賀にありしころは、十月の初なりしが例よりは暖にして、北國ながらも小春のしるしとて、打ちつゞき天氣うらゝかなれば、かの地の人にいざなはれ、この地にて人の言葉石といふを見にまかりぬ。

敦賀の町をはなれ、西の方にいづれば、きれいなる松原あり。是を一夜松原といふ。むかし神功皇后の御時、もろこしより、賊船おほく襲ひ來りしに、この海濱に、この松一夜の間におひいでゝ、梢に鷲のおほくむれ集りしを敵

の目にはおびたゞしき軍兵の旗差物と見えて、おぞろき恐れ、逃げされりといひつたふ。誠に松の木立より眞砂の白きさま、北國にはめづらしき土地なり。夫より五十丁ばかりにて、常宮といふあり。入海を隔てゝ敦賀の町とむかひあはせたれば、南おもての地にて、風景殊にすぐれ、このあたりの人の遊興のところあり。宮は仲哀天皇を祭れり。大社なり。遊行上人おぞこの國を經歷のときも、必この社へまうでらるゝことありとて、遊行上人代々奉納の和歌おぞあり。此の宮のうしろに高き山あり、凡京の比叡ばかりにも見ゆ。さゝいが嶽と名づく。この山にのぼること二十八丁にして、言葉の石の下にいたる、三十年ばかり前までは、知れる人もなかりしが、ふと木をわるものおのれが言葉のひゞくを怪しめるより、こゝかしこいひ傳へて、敦賀よりも、人々のぼり見ることになり、今にては、若狹侯も遊覽の所となりたり。石のたかさ十三間、横二十間といふ。この山の七八合目ともおもふ所に、南おもてにあり。甚大なるものあり。その間十五六間もへだてゝ、この石に向ひ呼ぶに、ことばの應ずること、石の物いふかと怪しまる。人衆すくなくて來る時は、何とおくものずごしといふ。かやうの石伊勢國にもあり、かの地にては、鸚鵡石と名づく、關東または九州邊にては、きゝもれよばず。

その日は、天氣も晴れ、殊にしたしき友人大勢にて、杯酒のたすけもあれば、一しほの興にぞありける。すべてこの邊は、勝地おほく、この山の北東の裾を、色の濱といふ。西行、芭蕉おぞもあそべる地にて、まづは貝名たかし。今も砂子にまじりてあり。むかしにおらひ、人々歌おぞよみ、松ともして旅宿にかへりぬ。



雅文、　この時代の初には、公家には烏丸光廣、武家には木下勝俊など、和歌和文を能くせし人々もありしかど、所謂國學として、古典、古文の研究を專にするは、德川光圀の文學を奬勵せし頃に、僧契沖、下河邊長流、北村季吟の三人より起れり。

國學の大家

長流契沖は、大阪に在りて、この學を唱導し、季吟は、江戸に在りて、古文の註釋に力めたりき。

契沖の門下には、安藤爲章あり。季吟の後に、季文あり。元祿以後には、有賀長伯、荷田春滿、子在滿あり。長伯の門人に伴蒿蹊あり。春滿、の門人に加茂眞淵あり。其の門下にて有名なるは、本居宣長、村田春海、加藤千蔭、加藤宇萬伎、揖取魚彦、荒木田久老、塙保己一等なり。寛政以後にありては、宣長の子春庭、門人平田篤胤、藤井高尙あり。春海の門下に、清水濱臣、高田與清あり。宇萬伎の門下に、上田秋成あり。保己一の門下に、屋代弘賢あり。其の他、富士谷成章、子御杖、谷川士清、足代弘訓、伊勢貞丈、橘守部等は、此の派以外の大家と稱せられたり。就中雅文を以て名ありし人々は、眞淵、宣長、春海、千蔭、濱臣、高尙、蒿蹊等と

文法の書出づ

す。蓋、當代國學者の專つとむる所は、古學の研究にあるを以て、單に歌文をのみ主とせしもの少し。されば、其の著書も、古文の考證註釋に關するもの多くして、雅文の著書少し。されど、この時代には、文章の研究も精しくなり、從ひて、文法書、語學書の類も、始めて、此等大家の手によりて撰定せられて、以て今日の如く整備するに至りしなり。

北村季吟

契沖、長流の傳は、既に前に述べたり。次に北村季吟以下の人々の事を述べん。

季吟は、初京都に在りて、松永貞德に俳諧を學び、後、幕府に召され歌學所となり、江戸に住す。博學にして、大に古書の註釋につとめ、著書五十餘種ありて、國文學に偉功あり。中にも、源氏物語湖月抄、枕草紙春曙抄、徒然草文段抄、伊勢物語拾穗抄、

士佐日記抄、萬葉集拾穗抄、八代集抄、和漢朗詠集註は、皆、世に名ある註釋書なり。寶永二年歿す。年八十八なりき。

**荷田春滿**

荷田春滿は、京都稻荷山の祠官なり。人と爲り、氣節あり、夙に國學の復古を以て自任じ、學校をも起さんとして果さず。死に臨み、生前著述の草稿を燒き棄てたりしといふ。元文元年歿す年六十九なりき。養嗣子在滿、亦、家學をつぎ、歌文を能くせり。春滿の門より出でたる加茂眞淵の傳は前に述べたり。其の著書中有名なるものは、萬葉考、冠辭考、祝詞考、神樂催馬樂考、源氏物語新釋等なり。眞淵の門人本居宣長は、殊に古學に力を盡したり。

**本居宣長**

宣長は、伊勢松阪の人なり。鈴の屋と號す。專國學の普及に力を用ゐたり。殊に、國體を明にし、又文法の學を正したりしは、偉功なり。著書の有名なるものは、古事記傳の大著述を初とし、萬葉集玉の小琴、源氏物語玉の小櫛、古今集遠鏡、新古今美濃家苞、歷朝詔詞解等は、精確なる註釋書なり。隨筆には、玉勝間あり。文法書には、紐鏡、詞の玉緒あり。歌文には、鈴屋集あり。

**村田春海**

世に、春滿眞淵の二人を合せ、國學の三大人の稱あり。初は、京都縉紳の間に書を講ぜしが、晚年紀伊家に仕へたり。享和元年歿す。年七十二なりき。子春庭、家學をつぎ、歌文をよくし、詞の八衢を作る、富士谷成章のかざし抄、あゆび抄等と、共に、文法書中有名のものなり。

村田春海は、江戸の人なり。宣長と同じく縣居門の高弟なりしが、かつて漢學を修め、其の法を國文に應用し、文に變化あり、遂に歌文を以て名を得るに至れり。世に貫之以來の文章

**加藤千蔭**

**雅文の名家及其の著書**

**扶桑拾葉集**

**八洲文藻**

家と稱せらる。其の歌文載せて、琴後集に在り。文化八年歿す、年六十六なりき。當時、深く白川樂翁侯の知遇を受けたり。加藤千蔭は、芳宜園とも、赤園とも號す、江戸の人なり。また、縣門の高弟なり。歌文を以て、世に名あり。其の著萬葉集略解は最、有名なる書なり。千蔭、また、狂歌、狂文、をよくし、筆札にも巧なりき。文化五年歿す。年七十四なりき。

此の外、雅文の作者も尚多く、其の文の見るべきもの亦多し。中にも、伴蒿蹊の閑田文草、清水濱臣の泊々舍集、藤井高尚の松の舍文集、松の落葉、中島廣足の橿園文集、松平樂翁の花月草紙、上田秋成の雨月物語等は、有名なるものなり。又、德川光圀の撰なる扶桑拾集、同續、及、齊昭が高田與清に命じて集めし八洲文藻は、歷代古文集として名高く、塙保己一の編纂に



かゝる正續群書類聚は、國史國文の參考書として、有名なる大著述なり。又、平田篤胤の著書中、古史成文、古史徵、古史傳等は最、謹嚴なる文章にして、殊に、史學上に大に功益あるものなり。

一、漫吟集序　　下河邊長流

昔のころも、つゞりの袖に、やまとうたもてあそびし人、ふるくは、まづ、おしがら山に舟木きりそめしたくみのこき出でゝ、いにしへのしら波たちつゞきあるは世をうぢ山の峯の雲より、人のさかひをはなれたる一首をつたへ、あるは石上ふるの山邊の霞にきえ、おがらの瀧もとゞろに高き名を殘し、おやしきためしにはまた天の川の水をひきて苗代水にいひながしたる人もありけん、それよりさきに出でたる。人は、僧といへど、すべてみな歌の林のひま人のみぞおほかる。しかるを、淺香の山の井あがれを尋ねてくみあらふ道の、いつとなくひと坂くだりぬと見しより、今の世までの

あひだにはたゞ、西行寂然らを上にたて、下にやう〳〵あらぶべき桑門を歌よみおよびを折りて、十までは、ふしがたしとさだめきぬるを、はるかにちとせの後にいでつゝ、滿誓沙彌が古き斧のえをつたへて、八雲たつ山のしげみわけいり、たてよこにたつきの音をなして岩垣ぬまのかくれむかしの人の見いでざるところを見いでゝ、物名俳諧の歌にいたりていひのこせることをく、無常をのべたる長歌は、その詞のおほかること、和歌の浦より千里の濱のまさごをつくせり。いまだわが國にかゝる長篇を見ざれば、かのから人の十とせをへておせり。とかいふある、都ふたつの賦にぞいひつゞくべき。猶こゝろみに、土にあぐれば、玉のひゞき數しらず、これあん僧契沖がみづからえたることがねのつもりおりけるを、われとも〳〵にそのはこをひらき見て、中にいまだちひさきものをばところ〴〵とりすてゝ、えらびさだむ。このことがね世をへてくちすまじければ、今より後、かの地にも、やまと歌に心をえて、見ることあきらかあらん人は、これを見あらはし、きくことさとからん人は、これにおどろかざらめやは。

## 二、隅田川に舟を泛べて月をもてあそぶ序　加茂眞淵

いつはあれど、照る月の秋のさかり、いづこはあれど、行く水の隅田川に、夕波のふた國かけたる月見むとて、からやまとの文人、糸竹にしもたへたるをつらねて、うかぶることあり。舟はしほのまに〳〵、棹おらずしてのぼり、きしはふねのまに〳〵、居ながらにしてぞうつる。きしはるかに晴れて、百のうてなにすだれをまき、風しづかに吹きて、ちぢのふねの帷をうごかせり。あるはくが、あるは船、あるはたかき、あるは、いやしき、呉の舞妓、高麗のわぎをぎ、色は波に匂ひ、こゑはそらにおんすみにける。これやこの、あしぶを分けつる國にやあるらん、都鳥にこと問ひける河にぞあるらし。時のゆければ、かゝる都にしもありにけるを、あるはめによろこび、心に驚き、あるは酔おきして、ひまをはめ、歌しのびして、いにしへをおむかたらひける。時にある人のいへらく、わがみかどに隅田川てふ河こそ多けれ。うちよする

駿河なる、大とりの出羽なる、この武藏なるは、いにしへの言の葉の集には下つぶさのあはひと書かれ、後の道ゆきぶりの日記には、ざがみのさかひなりとぞしるしける。いでや月まつ程のなぐさめに、人々この事さだめ給はんやといへど、なるが中に、ひとりあげつらふとは、それ、いにしへの集は、後の人の筆を加へたるなり。後の日記は、野らに問ひてしるすことなるはよるべきものゝなづむべからざるをや。そも〳〵あしをぎをやわけつらん。都鳥にやこと、ひけむ。あしをぎは、人草しげからむさがにして、鳥の名はみやこと、ならむしるしにぞありけらし。さかあれば、かゝる都のうちに、ながるゝ川をしも、絶えせぬ御代のためじにも引き、ふりにし名どころのよすがにも、いふべきなりけりとことをはれば、まちとりて物の音をわなゝかし、すみのぼる月にうそふきいでたる、いづれの所かはしかむ。いつの時にはわすれまし。すなはち舟こぞりてかしこけれは、今宵のありさま述べつくすべし。たゞわれひとり酔ふ、かゝれば何の心をかいはん。





わたつみの夕汐のぼる隅田川
　月の空まで舟も行かなむ

本居宣長

三、兼好法師が詞のあげつらひ

けんかうほうしがつれ〳〵草に花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかはとかいへるはいかにぞや。いにしへの歌どもに、花はさかりなる、月はくまなきを見たるよりも、花のもとには風をかこち、月の夜は雲をいとひ、あるはまちをしむ心づくしをよめるぞ多くて、こゝろ深きもとにさる歌におほかるは、みな花はさかりをのぞかに見まほしく、月はくまなからむとをおもふ心のせちなるからこそ、さも云あからぬを歎きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風をよち、月に雲をねがひたるはあらん。さるをかのほうしがいへるごとくなるは、人の心にさかひたる後の世のさかしら心のつくり風流にして、まことのみやびごゝろにはあらず。かのほうしがいへる言ども、此たぐひ多し。皆同じ事なり。すべて、なべての人のねがふ心に

たがへるを雅とするは、つくりとぞおほかりける。戀にあへるをよろこぶ歌は、こゝろふかゝらで、あはぬをあげく歌のみおほくして、こゝろ深きも、逢見ぬことをねがふから多り。人の心は、うれしき事はさしもふかくはおぼえぬものにて、たゞ心にかなはぬとぞ深く身にしみてはおぼゆるわざなれば、すべてうれしきをよめる歌には、心深きはすくなくて、心にかなはぬすぢをかなしみうれへたるに、あはれあるは多きぞかし。然りとて、わびしくかなしきを、みやびたりとてねがはむは人のまことの情ならめや。又同じほうしの、人はよそぢにたらでしなむこそ、めやすかるべけれといへるなどは、中ごろよりこなたの人の、みな歌にもよみ、つねにもいふすぢにて、いのち長からんことをねがふをば、心ぎたなきことゝし、早く死ぬるをめやすきことにいひ、此世をいとひすつるをいさぎよきとゝするは、これみな佛の道にへつらへるものにて、おほくはいつはりなり。言にこそさもいへ、心のうちには、たれかはさは思はむ、たゞひまれ〳〵にはまことに然思ふ人のわらんも、もとよりのまごゝろにはあらず、佛のをしへにまどへるなり。人のまごゝろは、いかにわびしき身も、はやくしなばやとはおもはず、命をしまぬはなし。されど、萬葉などのころまでの歌には、たゞ長くいきたらん事をこそねがひたれ、中ごろよりこなたの歌とは、そのこゝろうらうへなり。すべて何事も、なべての世の人のま心にさかひて、ことなるをよきことにするは、外國のなら、ひのうつれるにて、心をつくりかざれる物としるべし。

## 四、瀧のみやこ

本居宣長

この大瀧の里のあなたのはづれは、すなはちよし野川の川のべにて、瀧といふも、やがて川づらなる家のまへより見やらるゝ早瀬にて、上よりたゞさまにおつる瀧にはあらず。この瀧は、遠くてはことなることもなし、ちかくよりて見よと貝原の翁がをしへおきつることもあれば、岩のうへをとかくつたひゆきてせめてまぢかくのぞき見るに、そのわたりすべて、えもいはず大きなるいはほどものゝ、こゝら立ちかさなれるあひだをさしも大

きゐる川水の、はしりおつるさま、岩にふれてくだけわがる白波のけしきゐぞおもしろしともおそろしともいはむはゐかゐかおろかになりぬべし。むかしは筏もこの瀬をたゞにくだしけるを、あまりに水のはげしくてたびごとにだしわづらひし故に、いはほのややゐだらかゐる所をきりとほして、今はかしこをゐむくだすゐるとをしふる方を見れば、あゐたさまに、一みちわかれておちゆく水、げにこゐたの瀬よりすこしはのぞやかに見えたり。あはれ今くだしこむいかだもがゐ、いかでこの早瀬をくだすさま見むといひつゝかれいひくひ、酒ゐぞのみをる程に、みゐかみはるかにこの筏くだしくる物が、やう〳〵ちかづきて、この瀧のきはになりぬれば、のりたる者ども、左右の岩の上にとびうつりて、先ゐる一人綱をひかへてみな流にそひてはしりゆくに、筏のはやく下るさまは、矢ゐぞのゆくやうゐりさて岩のとぢめの所にて、人ども皆筏へかへる。そこは水のいきほひはげしくて、ほとばしりわがる浪にゆられてうきしづむ丸木の上へ、いた



はりもなくとびうつるさま、いと〳〵あやふき物から、めづらかにおもしろきことたぐひゐし。みゐ人この筏に見いりて、盃のゐがれはいづちゐらひともとはずなりぬ。さてこの筏瀧をはゐれてひら瀬にくだりたるをよく見れば、一丈二三尺ばかりのゐがさなるくれを、三つよつづゝくみゐらべて、つぎ〳〵に十六つゐぎつゞけたるは、いと〳〵長くひきはへたり。人は四人ゐむのりける。川瀬はこの瀧のしもにて、ゐゐたへをれてむかひの山ゐひに流れいる。右も左も物をつきたてたるやうゐる岩ぎしのもとに、さる流をしもくだしゆくけしき、だゞ繪にかけらむやうに見ゆ。かゝる所にては、中々に口ふたがりて、歌もいでこぬを、わざとうちかたぶきつゝ思ひめぐらさむもさまわしければ、さてやみぬ。いにしへ吉野の宮と申して、みかぞのしば〳〵れはしましゝところ、柿本の人まろ主の御供にさふらひて、たきのみやことよみけるも、この大瀧によれる所ゐりけむかし。そのをり〳〵の歌どもに、ゐはせて思ふに、ゐきづの小野ゐんといひしも、又

たきのうへの御舟の山もかゐらず、このわたりゐりけむこと、うたがひもなければ、今もさいふべきさましたる山やあると、心をつけて見まはすに、この川づらより、左のすこしかへりみる方に、さもいひつべき山あり。船にしていはむには、まへしりへたひらに長くて、なからばかりに一きは高く屋形といひつべき所ある山あり。これやさゐらむとは思ひよれど、いかにあらむ、おぼつかゐし。そは瀧の所よりはすこし去もざまにしゐあれば、たきの上といへるにはいさゝかたがへるやうにもあれど、なべてこのわたりゐらむ山は、なべかさいはざらむ。いにしへ忍ばむ人、また〳〵もこゝにきまさば、必こゝろみ給へ、やがてこの里の上ある山ぞかし。

五、越前のかうの殿に侍ふきち子のもとへおくれる書

村田春海

とのにまうのぼり給ひて後は、おのづから、雲ゐのよそなる心ちし侍りて、たつ霧の、ほのかにのみ、思ひまゐらせ侍りしを、きのふ、ゆくりゐう、打ちおどろかさせ給へるは、荻のうれ吹く初風よりも、いとめづらかになん。さるは、おもと人たち、うちつどひ給ひて、來んよひの、星のあふせを、しのびいで給へる御こゝろのはべども二卷、ふりはへて、しめしたまへるゐんうれしき。先、みもてゆき侍るに、色に、にほへる千ぐさの露を、分け入りて、花のゝ錦におりたち侍る、心ちのせられ侍りて、めもあやゐるは、誰も〳〵、たゐばたつめの手にやゐえ給ひけんとおもふに、こよゐき御すさみなりや。げに、大かたのよにに、みやびごゝろこのませ給ふ殿の、御手ぶりこそしるかりけれ。かゝるにつけても、ぬひ子のゝとじが、世にありがたかりしすくせの、おもたゞしう侍りしも、いまは、一時の夢とおもひゐさるゝ、つねゐき世のさがこそ、わりゐきわざに侍れ。きのふは、かのゝとじが四十九日にあたり侍りて、人々、歌などよみて、しのび出で侍りしを、御せうそこ、うけ給はるにも、いとゞわらましかばとゐん思ひつゞけられ侍りぬる。人々の歌どものなかに、千枝子が長歌ひとつかいしるして、まゐらするを、殿には、ゝじにしたしかりしごたち、ゐ

またおはすめれば、しのぶのくさ、つみはやし給はんをりあらば、みせ給ひねかし。猶、人々のも侍れば、そは、さらにも、物し侍りぬべし。今は、いとまおきほどにて、もらし侍りぬ。あおかしこ。

六、八月十五夜、家にて、おの〳〵題を分ちて、文作れるに山里の月といふを題にて、

加藤千蔭

耳に鳴弦の音をきかず、目に旗手の靡きをも見ぬおほむ時世に逢ひては、何事につけても、憂しとわびしと、怨みかこつ事やはある。されば、世を避くとしもあらねど、商じこる市の巷に近き賤はゝしさを厭ひて、此山里には移ろひ住めるにおむわりける。秋こそ殊にといへる、宜おるかお。離の下に佇める小鹿、松に木傳ふ猿の聲も、獨ある人を慰むるに似て、憐おるに、茜さす日も入りはて、杣人の斧のひゞき絶えて、端山のかひより、月さし登れど、そがひの峰より落つる瀧つ瀬は、黄金の色の絲、引きはへたらむ如く、岩に碎くる水は、白玉をこき散すかとぞ疑はる。とこしへに清らかにして、物に滯る事おきをわが心とはせむと思ふに述べてむものは何ぞ、唯、月と瀧つ瀬とのみ。

七、學問のこと

松平定信

かの人は、雪はたるおつめし窓に、年をつみて、ふみゝる道に心をつくし侍るおり。されば、世中のことには、いとうとく侍りといへば、さることそまことの道まねぶ人おりけれとほめものする者もありとや、もとより道まねぶものは、五のつね五のみちよりして、人ををさめ、已をゝさむる道まねぶより外のことはおし。されば、世のことにさとく、今のあたりのみかは、千とせの前つ世のこと、見ぬもろのこしの今のさまより、さかりおとろふるきざし、人の心のうへより、仕ふる道のくさぐさに至るまでも、明おるをこそ道まおぶ人とはいふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とはいふべからむ。

八、ことばとがめ

同

通俗文

霜夜をわびて、水鳥のおくを、物しりがほなる人が、水鳥のさへづるよといひしを、れなじやうなる人うちきゝて、鶯の囀るなどとはきけど、水鳥のといふは、いと物ごとにあらたまりめづらしきことをきゝしかなといふ。初の人うそぶきながら、はし姫の卷に、水鳥のはねうちかはして、おのがじゝさへづる聲とあるものをと、心得がほにいひたるもわろし。もとめてめづらしきことといふべきものかは、そばきりをこのみ給ふやといふべきを、かろうはいかにといへば、からきものこそ好み侍れといひしを、とひし人わらひき。しるべき人にはいひもしむむ人をもしらでかやうの事いふは、くらき心より出づるなりと人のいひし。

通俗文、和漢混和文は、平易にして解し易しと雖、なほ、廣く俗耳に入ること能はず。雅文は、優美なれども、これも、亦、學問なきものに通ぜざるなり。通俗文體の廢すべからざる理由はこゝに在り。さて、この文體の長所は、自由に俗語を用ゐて、



小說

俗文

或は言語體に、或は文章體に、巧に、其の思想を描き出すにあり。されば、戯作者、俳人などは、之を用ゐて、通俗文學を盛にしたり。

初、當代の初期に、言文一致體の物語世に出でたり。之をおほん物語といふ。この體は、當代を通して、時々行はれたり。又、老人雜話、武邊咄聞書、駿河土產、岩淵夜話などの書は、俗文の體を以て述べしもの多く、當代の末期まで通じて行はれたり。此等は、文學書の類には非ざれども、歷史上の參考として、有要なる材料なり。

而して、通俗文體より成れる文章を以て盛に行はれしものは、小說、演劇脚本、俳文、狂文の類なり。

小說は、當代文學の大半を占めし程なりしが、其の初は、因果

物語、浮世物語などの教訓的のものなりしに、天和の頃より、浮世草紙世に出で、淫靡なる短篇ものを見るに至れり。これ、所謂、端物なり。其の作者の有名なるを井原西鶴といふ。

端物

井原西鶴

西鶴は、大阪の人なり。嘗て西山宗因に俳諧を學び、其の高弟たり。其の著は、よく、人情風俗の委曲を盡せりと雖、卑猥淫靡にして、殆見るべからず、識者多く之を譏れり。然れども、其の筆鋒の鋭利なることは、當時に超出せり。これ世に稱せらるる所以なり。元祿五年、五十一にして歿しぬ。

戀情小説

その後、寛政の頃までに、端物はいよ〳〵進化して、戀情小説となり、益盛に行はれ、卑猥なるもの多く世に出でしかば、幕府は禁令を發し、其の發行を嚴禁したり。是に於いて、歷史小説起れり。歷史小説は、古代の事蹟人物を假りて、現代の事柄

幕府の禁令

歷史小説



を寫したるもの、又は、全く往時の事實を粉飾したるものなり。この種の著作家として有名なるものは、山東京傳、曲亭馬琴、柳亭種彦なり。

山東京傳

曲亭馬琴

京傳の本名は、岩瀬醒といひて、江戸の商家の子なり。文化十三年、五十六にして歿しぬ。其の著二百五十餘種あり。本朝醉菩提、稻妻草紙等最名あり。又、近世奇跡考、骨董集等の著ありて、世に行はれたり。

馬琴は、京傳の門人なり。本名は、瀧澤解といひ、江戸の人にして、旗下の士に仕へたり。初、醫學經學を學びしが、後、專、小説家を以て世に立ち、遂に、當代第一流の著作家となれり。其の著二百六十餘種あり。中にも、南總里見八犬傳、椿説弓張月、俊寛僧都島物語、朝夷奈巡島記、夢想兵衛蝴蝶物語等、最有名なり。

柳亭種彦

其の文章、自在にして筆力あり。其の結構變化ありて、前後小說家の及ざる所なりといふ。雜著に、玄同放言、羈旅漫餘、著作堂一夕話、蓑笠雨談等あり。嘉永元年、八十二歲にして、博學、文才あり。其の著九十餘種あり。田舍源氏、最有名なり。こは、源氏物語の飜案にして、文頗、平易流暢なり。隨筆に、用捨箱、還魂志料あり。天保十三年、六十にして歿しぬ。

草双紙

種彦の草双紙を以て、名を得たる頃、滑稽小說出で、寬政の禁令漸弛むに及びて、人情本また出でたり。滑稽本は、專、戲文を以て記したるものにして、其の作者は、十返舍一九、式亭三馬最名高し。三馬は、江戸の人にして、本名を菊池泰輔といひ、一九は駿府の人にして、重田貞一といひ、江戸に出で著作に從事せり。二人、同時に出で、文化、文政の頃、盛に、滑稽小說を出せり。三馬の著百餘篇あり。浮世風、浮世床等、最名あり。一九の著三百餘篇、道中膝粟毛、最世に賞せらる。

人情本爲永春水

人情本の出づるに方り、爲永春水出でたり。本名は佐々木貞馬、江戸の人なり。當代の末期、人情浮靡なるに乘じ、戀情小說又出でたり。春水等の作、即是なり。其の著、梅曆、いろは文庫等は廣く行はれたり。然れども、其の文、卑陋醜猥にして、風紀に害ありとて、天保年中、幕府より、絶板を命ぜられ、其の身も、亦罪に處せられたりき。

俗文通俗文の例

これより以後、小說界には、殆見るべきものなく、幕府の衰ふると共に、遂に、衰廢に屬したりき。

一、おあん物語の一節

子供集まりて、おあん樣昔物語あさりませといへば、おれが親父は、山田玄
暦というて石田治部少輔殿に奉公し、近江の彦根に居られたが、その後治
部殿御謀反の時、美濃の國大垣の城へこもりて、我々皆々一所に御城にゐ
ておじやつた。不思議な事がおじやつた。夜な〳〵九つ時分に、誰ともなく
男女三十人程の聲にて、田中兵部どの〳〵。田中兵部どの〳〵。とをめきて、
其のあとにて、わつというて泣く聲が、夜な〳〵しておじやつた。おどまし
やおどましや、恐ろしうおじやつた。
その後、家康樣より、攻衆大勢城へ向はれて、いくさが夜昼おじやつた。其の
寄手の大將は、田中兵部殿と申すでおじやる。石火矢を打つ時は、城の近所
を觸れ廻つておじやつた。それはあせなりや、石火矢を打てば、櫓もゆるゆ
る動き、地も裂けるやうにすさましいさかひに、氣の弱き婦人あぞは、即時
に目をまはして難義した、其故に前方に觸れておいた、其觸があれば、光り
ものがして、雷の鳴るを待つやうな心しておじやつた。始の程は、生きた心
地もなく、唯物恐ろしやこはやとばかり我人おもふた、後々は、何ともおじ
やるものじやない。我々母人も、其外家人の内儀達も、皆々天守に居て、鐵砲
玉を鎖ました。

## 二、人質の勘辨の事

權現樣駿府に御座被成候時、御近習衆へ被仰聞候は、人質は時に寄て取置
もの也、餘り久敷取置候へば、親子とても親み薄くあり結句詮なく候、義理
を強く存する者は、主人の爲には、親子とても存替る者あり、されは、能々親
子の中したしませ置て、時に臨んで人質に取候へば、去たしみを忘れず、愛
に溺れて、人質を捨ざる者あり。然れ共、人質を頼むにあらず、義を以て不義
を討時は、石をはいこに拋がごとく也との上意あり。

## 三、室町の季世四書素讀教ふる人なかりし事　老人雜話

老人に、少年の時、浴中にて四書素讀教る人あし。公家のうち山科殿知られ
りとて三部を習ひ、孟子に至りて、本を人に借し置きたるとて、終に教へず、

實はしらざるあり。右の時分外家の道伯と云人、論語を講談す。惺窩伯父宣首座（相國寺普光院の僧侶父の弟）も老人と同じく、毎度講席に出ぬ。

## 四、桶挾間の戰

太閤記

今川勢の四萬餘騎は、兩方に別れて戰ひしが、其先手の合戰は、織田方最も強くして、妄りに進擊するを得ず。又海道の戰爭も、前田犬千代に支へられ、兵士等數多討死して、此手も進み難かりしが、何を云ふにも今川方は、目に餘る程の大勢あるに、織田方は又少勢にて、入替るべき兵無ければ、終には勢力盡果てゝ、叶ふ間敷ぞ見えたりし。然るに、此時義元は、先手の味方討死ありと聞きて殊更怒りを含み、旗本勢を殘らず遣はし、一時に勝負を決せしめんと、武勇に誇りて、本陣には、纔に一千許りの近習、及び小性等のみを殘し、是等は用に足らざれ共、此所は山岨の狹間にて、地形凸凹の處多し。且其後は味方の地にして、前は軍勢連續しぬれば、恐るゝ事は更に無しと、用心する體もなく、酒宴を設けて居し折柄、朝比奈備中守が手より、織田方の勇士、佐々木隼人、千秋四郎の首を奉りければ、義元、さも有る可し、今に敵將信長の首を見る可きぞと、心奢りて酒宴に興じ居られけり。此時、信長には間道を經て、敵陣の後へ廻られけるに、木下藤吉郎、義元の旗本勢、皆先手に到り、本陣無勢なるを窺ひ知りて、今こそ味方必勝の時なりと、揉に揉んで馳ける處に、信長開運の時節なるにや、忽然と一朶の簇雲起るや否や、烈風砂を捲き、石を飛し、驟雨繁くして、面を向可き樣ぞ無き。然れ共、織田方は後より吹風あり、敵は向風なれば、木下藤吉郎大に勇み、是れ正に熱田明神東夷征伐の神風に異なる事無し。神明加護の力を以て、勝利を得ん事疑ひ無しと。勵ましければ、信長には悅喜有り。從兵等も元來俊たる勇士等なれば、さあらぬだに進む氣强に、此瑞を見て、爭でか勇まざる可き。我先にと進む輩らには、服部小平太忠次、毛利新助秀詮、遠山甚太郎秀忠、中條小八郎信定、林藤八郎興世、織田酒造之丞等、皆一人當千の逞兵なり。已に本陣近くなりたれども、雨風に紛れて、味方の物音、敵陣に知る者無し。頓て雨降止むも、風未

だ靜まらぬば、一入味方の吉瑞ありと、木下藤吉郎眞先に進めば、信長勇んで諸勢に向ひ、志す處は義元一人あり。無益の敵には目な掛けそ。進る族は討つて捨て、大將義元と見るならば、何處までも遁す可らずと下知して、自から槍を追つ取り、馳せ給へば、五百餘騎の逞兵共續いて馳付け、敵陣へ會釋も無く、鬨を作つて切つて入れば、義元驚き、此は如何に、何者なるや、謀反人かと云間も無く、織田勢駈入り〳〵、無二無三に切り立てけるにぞ、思寄らざる不意を討たれて、今川勢騷ぎ狼狽散亂して、近習小性等三百計り、義元を守護して東を指して走ければ、木下藤吉郎大音上げ、敵將義元東を指して走りたるぞ。遁すな進めと下知を爲し、短兵急に追て行く。始めは義元塗輿にて急ぎけるが、織田勢嚴敵追ひ來る故、近習等有り合せたる馬を引立て、義元を乘らしめて、馳せけるに、足場惡く自由に進み難く、心計りは速れ共、詮方無くぞ見えにける。藤吉郎思慮を廻らし、義元は疵を得たる猪の如き勇將なれば、詞を以て呼返さんと、馬を進め聲勵まし、未練に候ふ今川殿。遙々との御上洛聊か應接し申さん爲め、織田上總介信長自ら來つて見參せんと欲する處に何處まで逃給ふぞや。聞きしに違ふ憶病の大將哉と、詈り呼はりけるにぞ、勇氣强剛の義元大に怒り、馬を止め、奇怪の詞を聞くもの哉、今川義元は敵に後を見せたること無し。信長ならば願ふ所の敵あり。對面すべしと引返すを、從兵共は爰にて返させ給ふ所にあらず。本道迄退き給へと諫むる中に、織田勢はや近付きぬ。義元爰を退かんとせば却りて敵に追討せらる可し。假令一命を殞すとも名こそ惜む可き事なれ。汝等我と共に命限りに防戰せよ。其際には味方の兵も來るべしと申されければ、從兵是非なく是に隨ひ、追來る敵を待請け、懸合々々戰ひたり。織田方の勇士共勝に乘つて各々勇を振ひ切つて廻るに、義元の從兵悉く討死して、漸く近習小性共、十人計りに成りけるにぞ義元は馬より下り、士卒を下知して居られけるが、云甲斐なき輩哉、我勇戰を見すべしとて、今川重代の松倉鄕と號したる太刀を拔き、自ら敵に渡り合ひ、一世の働き、飛鳥の如き早

業に、織田勢數多手負ひ討死ありて、其勇威に恐れ、近付く者も無き所に、軍の全勝は義元を討取るに在りと、思ひ詰めたる勇士共、大將と見るより、我先にと駈付く。中にも服部小平太忠次、槍を捻つて横合より駈出で、義元の右の太股を突止めたり。義元無双の勇將なれば、深傷を厭はず、持つたる太刀にて横に薙れば、服部小平太其左の足を切られて、尻居に撞と坐しけるを義元突かんと立上がるを、毛利新助秀詮駈付け、無手と義元に引組んだり。義元元來大力あれば、押倒さんとせられしかども、鎗疵深くて足立たず。終に新助に組伏せられ、無念の餘り、秀詮が左の指に喰付きしが、新助も剛の者あれば、指に喰付かれながら、難なく義元が首を取つて、太刀の先に貫き差上げたり。于時義元四十二歳。勇名關東に隠れ無かりし良將なれども、武運盡きしか、木下が軍配に欺かれて、旗本を透され、不意を討たれて、終に毛利新助が爲めに討死せられけるこそ無念なれ。新助即ち信長の前に、義元の首を持參せしかば、信長悦喜限り無く、神の賜物、得難き首を、容易く討取りぬるこそ大切なれと、義元の首を見て涙を浮め、さしも名高き良將なりしが、運拙くして、一戰に討死せしこそ痛ましけれと、歎息有けるにぞ、勇士等も思はず愁傷を催しけり。

五、　爲朝白峯の山陵に詣づ　　椿說弓張月

かくて其日も暮なんとする程に、と見れば、群鴉星を負ふて茂林に歸り、樵夫月を戴いて家路に急ぐ、唧ましき虫の音に、葉末の露ぞ濺やかなる。既に人跡絶えければ、爲朝は、ふりたる木のもとに立寄りて、衣服を更め、御墓に詣うで見れば、千草は一叢の煙を殘して、玉殿燈なく、秋螢は五更の夜を照して、荆棘路を塞げり。百石城や百官は紫の袖を列ね、朝政開し食ける十善の君として、過世の惡業は脱れたまはず。青塚苔滑にして、白楊風に戰ぎ、旅魂幽靈今何所にか伸吟たまふやらん。げに人界の富貴は、夢の中なる快樂にて、妻子珍寶及王位も、身死しては伴侶あらず。さればとて、三界の火宅を出で、永く九品の淨刹に至らん事、なほ容易にあらざんめり。これを見彼を

思ふにも、我身の果は數あらで、不覺に涙ぞ先だちける。折しもさし入る月光に、御廟の柱を向上れば二首の歌を書きたり。

讃岐に詣で、松山の津と申す所にて、新院おはしましけん御跡を尋ねしに、かたもあかりしかば。

松山の浪にあがれて來し船の
やがて空しくありにけるかな

白峯とまをす所の御墓に參りて、

よしや君むかしの玉の床とても
かゝらん後はあにかはせん

仁安三年十月日圓位とあり。さては西行法師も、去々年の冬にこゝへ參りけんと、魚頭つゝ。石の玉垣の斜なる扉を押開きて蹲蹲して、さて申すゝう君十善萬乘の聖主として、錦帳を北闕の月に輝かしたまひしも、今は懷土望鄕の魂、玉體を南海の俗に混ず、露を拂て御跡を尋ね奉れば、秋草泣て涙を沃ぎ嵐に向て君が墓を問へば、老槍悲て心を傷しむ。佛儀は見えずして只朝雲夕月を見る。法音は聞えずして只松響鳥語を聞く。軒傾きては曉風寒く。夢破れては夜雨防がたし。昔今の御有樣、いと痛しくも淺ましく思ひ奉れど、微臣が孤忠を連るに由なく、既に勢竭き力究りて、今生の誠忠を訴へ。後世の苦樂を共にし奉り、君に强顏かりける者どもを、悉くとり殺さばやと思ふのみ。はからずも、大島を逃れ來りて、尊靈を驚かし奉るものなりと申はてゝ、涙を潸然と落しつゝ、やがて氷あす短刀を拔て腹に突たてんとするに、怪きかな手足忽地に癱瘓て、いかにともすべなし。時に兒が嶽の方に叢雲棚引きて、月は半面を顯しながら、影いと暗く、電閃あく閃きて、御墓の中に散徹し、山嵐のいと凄じきに、吹ちる木の葉もろともに、武者四十騎前駈して出來りたり、次に腰輿を昇ものは、すべて象の鼻鳶の啄にて、左右の腋に翅立たり、

六、狹山の洞

八犬傳

さても、里見治郎太輔義實の御息女伏姫は、親の爲、又、國の爲めに、言のまことを黎民に、失はせじと身を棄てゝ、八房の犬に伴はれ、山道を指て入日成す隱れし後は人訪はず、岸の埴生と山川の、狹山の洞に眞菅敷、臥房定めつ冬籠り、春去來れば、朝鳥の、友呼ぶ頃は、八重霞、高峯の花を見つゝ思ふ、彌生の里の雛遊び、垂髪少女が水鴨成す、二人双居今朝ぞ摘む、名もおつかしき母子草、誰搗きそめし三かの日の、餅にはあらぬ菱形の、尻掛石も屬ふれて、稍暖き苔衣、脱かへねども夏の夜の、袂涼しき松風に、櫛らして夕立の、雨に洗うて乾す髪の、蓬が下に鳴く虫の、秋としあれば色々に、谷のもみぢ葉織映えし、錦の床も假染の、宿としらでや鹿ぞ鳴く、水澤の時雨霧間おき、果は其所ともしら雪に、岩がね枕角とれて、眞木も正木も花ぞさく、四時の眺望はわりおがら、わびしく居れば鹿自物、膝折布せて外に立たず、後の世の爲とはおりに經文讀誦書寫の功、日數積ればうき事も、憂に馴れつゝうしとせず、浮世の事は聞きしらぬ、鳥の音獸の聲さへに、一念希求の友とおる、心操こそ殊勝おれ。

## 七、みやび女の問答

浮世風呂

（前畧）本居信仰にて、ひにしへぶりのまおびおぞすると見えて、もの靜かに、人柄よき婦人二人、各、玉たれのおく深く、侍るだらけの文章をやりたがり、几帳のかげに、檜扇でもかざしてゐるさうお氣位おり。（けり子）鴨子さん此間は、何を御覽じます。

（かも子）ハイ。うつぼを讀返さうと存じて居る所へ、活字本を求めましたから、幸に異同をたゞして居ります。さりおがら、舊冬は、何かと用事にさへられまして、俊蔭の卷を、半ば過ぐるほどで捨置きました。

（けり子）それは、よい物が、御手に入りましたね。

（かも子）鳥子さん。おあなたは、やはり源氏でございますか。

（けり子）さやうでございます。加茂翁の新釋と、本居大人の玉の小櫛とを本にいたして、書入れをいたしかけましたが、俗（さとび）た事にさへられまして、筆を

執るいとまがござりませぬ。

(かも子)先達でお噂さ申ました、庚子道の記は、御覽じましたか。

(けり子)ハイ。見ました。おかゝ手際あことでござります。しかし、疑はしい事は、あの頃には、まだ開けぬ古言あゞが、今の如く開けて、づかひざまに誤りのあい所を見ましては、校合者の添削あゞも、すこしあつたかと存せられますよ。

(かも子)何にいたせ、女子であの位あ文者は珍らしうございます。先日もはかで、消息文を見ましたが、いにしへぶりのかきざまは、手に入つたものでございます。

(けり子)さやうでござります。何ぞ著述があつたでございませうね。世に殘らぬは惜いことでございます。ホンニ怜野集をお返し申すであつた。永々御恩借いたしましだ。有りがたうございます。

(かも子)いへもう御ゆるりと御覽なさりませ。ヒたくしは、うけらが花を一冊かし失ひましたが、トント行方がしれませぬ。

(けり子)イエどうも、かし失うて困りますよ。此間はお歌はいかゞでございます。

(かも子)何か埒明きませぬ。先日どあたにか承りましたが、ああたは、ひあぶりをもお詠みなさるさうでございますね。

(けり子)ハイ。もうお耻かしい事でございます。あまり本歌で退屈いたす時は、あゞさみがてら、俳諧歌をいたしますが、何、もうお耻かしい、お耳に入つてはおそれ入ります。

(かも子)イエサ。萬葉の中にも、大寺の餓鬼のしりへにぬかづきの歌、エ、それから、夏疲に、よしといふもの、ひあぎとりめせのたぐひ、その外あまた見えますし、特には、續萬葉に、俳諧歌と申す躰がヒかりましたから、無心躰の歌も、おあゞさみには宜しうございます。

(けり子)イエモウ、松のおもはん事もはづかしでございます。此間ね、あまり

いやしい歌でござりますが。おかちんをあべ川にいたして、去る所でいたいきましたから、とり敢へず、一首致しました。

うまじものあべ川もちはあさもよし
きな粉まぶしてひる食ふもよし

といたしました。ヲホ、、、。

(かも子)ヲホ、、、。冠詞をふたつ立入れて、至極面白う承ります。まぶしてあどがどうか古言のやうに聞えまして、ヲホ、、、。

(けり子)イエもう、ほんのあぐさみでございます。先生あどのお耳に入れたらお叱り遊ばすでございませうよ。

(かも子)何、おまへさん、いづれ雅の道でございますものを、ヲホ、、、。うまじものあべ川とかゝり、あさもよしとうけて、豈食ふもよし。どうもいへません、ヲホ、、、。あなたお道入りあさりますか。

(けり子)ハイ。まづおさきへ(とさくろ口へはいる。)



**演劇脚本**

脚本、　脚本は、演劇の節書にして、臺詞、及、舞臺の模樣等をしるしたるものなり。歌舞伎の進歩に伴ひて、漸整ひ來れり。されば、初は元祿の頃より、寶曆の頃に至りて、漸次其の作者に妙手もあらゝれ、堀越榮陽、鶴屋南北、並木五瓶等の作出でたり。然れども、文學として見るべきもの甚だ少し。

**作者**

**俳文狂文**

俳文、狂文、　元祿頃より俳諧の盛なりしに從ひ、俳文といへる一種の戯文體始まれり。其の文は、滑稽的の小品文にして俳諧師として、之を作ざらるものなきが如し。芭蕉、支考、許六等の作も多く、許六の風俗文選、支考の本朝文鑑等に見えたり。されど、寶曆の頃に至り、横井也有の鶉衣出で、其の妙を稱せらる。也有は尾張の士人にして、孫左衛門と稱し俳諧を善くし、殊に、滑稽に長じ、其の文の輕快、奇變なる、其の比稀なり。

**横井也有**

天明三年、八十餘にして歿しぬ。

**平賀源内**

狂文も、戯文の一にして、俳文に比しては、一層滑稽にして卑俗なり。戯作者、狂歌師等の好みて作りしものなり。作者の名高きものは、平賀源内、(風來山人)太田蜀山、宿屋飯盛、橘千蔭等なり。中にも、風來山人の著六々部集最著はれたり。源内は、鳩溪と號し、明和頃の人にして、奇才あり。本草にも委しく、漢學の素養もあり。また、當世の一畸人なりしなり。其の文、卑野なる詞多く、また、嘲罵の氣を含めり、蓋、其の不平の文に溢れたるものなり。

**俳文狂文の例**

一、百蟲譜　　横井也有

蛙は古今の序にかゝれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しつまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目さましたれば、此物の事さらにも誘りがたし。

芋虫は腹たつものにたとへ、毛虫はむつかしき親仁の號とす。脊むし客むしは、名のみにして虫あらず。油むしといふは、虫にありてにくまれず、人にありてきらはる。

蟹のあゆみにたとふべきものこそあけれ。たゞ、原吉原を怨にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

蚊はにくむべき限りあがらざすが卯月の頃、端居めづらしき夕、はじめてほのかにきゝたらむ、又は長月の頃、ちからなくのこりたるは、さびしきかたもあり。蚊屋釣たる家のさま、蚊やり燒里の煙などかつは風雅の道具ともあれり。藪蚊は特にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙あかりけむ。

二、月雪花　　蜀山人

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかはと、おらびが岡のすね者

は云へれど、花は立春七十五日、月は三五夜中の新月、後のつきもまためでたし。雪は豐年の貢物とは云へど、跡くさらかしもうるさしと、明阿彌陀佛のふみにも書けり。げに降るとても、若菜の價たかうあらぬはぞこそ、門田もる犬も喜ぶべけれ。

## 結論

以上六篇にて、上古より、近代江戸時代を終るまでの文學の盛衰沿革を略叙したり。今、更に、之を概論せば、上古の文學は淳素雄渾にして、其の中、自、一種優美なる思想を含み、次期奈良朝時代に至りて、漢學佛教等外來の學術によりて、之を潤飾し、更に、一層の光彩を添へ、典雅にして雄健なる文學となり、文學史上に美花を開きたり。然るに、その末期より、漢文學の隆盛に從ひ、次期、平安朝時代の前半は、殆、漢文學極盛時代の如く、國文學の進歩に一頓挫を來せり。されど、此の間に片假名、平假名二種の國字の生出せし爲、大に、國文學に便利を與へ、尋いて、紀元千六百年代の前後に於いて、國文學振興の隆運に遭ひ、更に優美纖麗なる文學となりて現はれ、遂に漢文

學を壓倒して、其の盛を極めたり。末期に至りては、漸、衰兆を呈し、次期鎌倉時代に至りては、歌文ともに衰へ、戰記文極盛の時代となれり。この時代に於いては、佛教思想と、武士氣風とは、深く文學に入り、尙、次期室町時代にも及ぼしたり。室町時代の前半は、歌文なほ見るべきものなきにあらざりしが、和歌は、連歌と變じ、謠ひ物には、謠曲を出し、後半期は、全く、連歌謠曲の極盛時代となれりき。殊に、この期の末、戰亂うち續き、朝廷の式微となり、次期江戸時代に至り、文學は、全く、武家の手によりて、維持振興せられ、從ひて、中流以下に於いて、發達進歩したり。然れども、この時代は、二百餘年の昇平を保ち、その間に於いて、漢學も、國學も、非常の進歩をなしたるゆへ、上古以來歷朝の文學は、大抵興復し、更に、下層文學たる戲曲小說には、前代未曾有の盛觀を呈し、又、末期に於いては、西洋學術の輸入などありて、飜譯書の出づるあり。文法書に、歐風を參考するなどのことあり。醫學に、語學に、文學に、多少の新空氣を入るゝことゝなり、以て、明治現代の文學を生み出す基を成せりき。之を要するに、江戸時代の文學は、材料に富み、變化多く、前古無比の盛を致せりといふべし。若、夫、明治現代の文學は、更に、一層の盛美を極めんこと疑なしと雖、未、進歩變化しつゝある中途にありて、之を通觀すること、甚困難なれば、更に之を論ずべき時機の來るを待つべきのみ。

**中等國文學史**　終

# 國文學史年表

上

| 時代 | 天皇 | 紀元年代 | 年號 | 有名なる文學者 | 有名なる著書 | 文學の種類 | 參考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 神代 | | | | 素盞嗚尊 大國主命 | 國文 漢文 | 歌謠 文章 | 短歌 長歌 |
| 神代 | | | | 下照姫 豐玉姫 | 國文 漢文 | 歌謠 文章 | 短歌 長歌 |
| 神武 | 一〇〇 | | | 神武天皇 | | | 短歌 長歌 始て起る |
| 綏靖 | 二〇〇 | | | | | | |
| 安寧 | 二〇〇 | | | | | | |
| 懿德 | 二〇〇 | | | | | | |
| 孝昭 | 三〇〇 | | | | | | |
| 孝安 | 四〇〇 | | | | | | |
| 孝靈 | 五〇〇 | | | | | | |
| 孝元 | 五〇〇 | | | | | | |

古

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 開化 | 六〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 崇神 | 七〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 垂仁 | 八〇〇 | | | | | | | | | | | | 三韓交通す |
| 景行 | 八〇〇 | 日本武尊 | 橘姫 | | | | | | | | | | 連歌の始 |
| 成務 | 九〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 仲哀 | 九〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 應神 | 一〇〇〇 | 應神天皇 | | 雅耶王子 | 仁徳 | | | | | | | | 漢籍渡來す |
| 仁德 | 一一〇〇 | 仁德天皇 | 皇后 | | | | | | | | | | |
| 履仲 | 一一〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 反正 | 一一〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 允恭 | 一二〇〇 | 允恭天皇 | 衣通姫 | | | | | | | | | | |
| 安康 | 一二〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 雄略 | 一二〇〇 | 雄略天皇 | | | | | | | | | | | |



時

| | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 清寧 | 一二〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 顯宗 | 一二〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 仁賢 | 一二〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 武烈 | 一二〇〇 | 武烈天皇 | | | | | | | | | | | |
| 繼體 | 一二〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 安閑 | 一二〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 宣化 | 一二〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 欽明 | 一三〇〇 | | | | | | | | | | | | 佛教渡來す |
| 敏達 | 一三〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 用明 | 一三〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 崇峻 | 一三〇〇 | | | | | | | | | | | | |
| 推古 | 一三〇〇 | 推古天皇 | | 厩戸皇子 | | 十七憲法 | | | | | | | 遣隋使及遣唐使出つ |
| 舒明 | 一三〇〇 | | | | | | | | | | | | |

| 代 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 皇極 | 一四〇〇 | | | | |
| 孝德 | 一四〇〇 | 大化、白雉、 | | 高向玄理 中臣鎌足 | 大化の改新 |
| 齊明 | 一四〇〇 | | | | |
| 天智 | 一四〇〇 | | 天智天皇 額田女王 | | |
| 弘文 | 一四〇〇 | | | 弘文天皇 | 漢詩の始 |

| 奈良朝時代 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 天武 | 一四〇〇 | 白鳳、朱鳥、 | | 大津皇子 | 長歌 祝詞 | 漢學盛に行る |
| 持統 | 一四〇〇 | | 持統天皇 柿本人麿 | | 短歌 旋頭歌 | 大學を建つ、萬葉假名起る |
| 文武 | 一四〇〇 | 大寶、慶運、 | | 藤原不比等 | 御即位の宣命 大寶令 | 宣命 |
| 元明 | 一四〇〇 | 和銅 | | 太安萬侶 | 古事記 風土記 | 古事記序 | 歷史 地誌 | 長歌量盛なり |
| 元正 | 一四〇〇 | 靈龜、養老、 | 山上憶良 | 舍人親王 | 日本書紀 |
| 聖武 | 一四〇〇 | 神龜、天平、天平、感寶、 | 山部赤人 大伴旅人 | |
| 孝謙 | 一五〇〇 | 天平時寶、天平寶字、 | 橘諸兄 | 吉備眞備 | 片假名成る |
| 淳仁 | 一五〇〇 | | 大伴家持 | 萬葉集 |

| 平安 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 桓武 | 一五〇〇 | 延曆 | | 清原夏野 藤原冬嗣 萬多親王 | 菅原清公 忌部廣成 | 古語拾遺 | 新撰姓氏錄 續日本紀 | 短歌 催馬樂 神樂歌 | 六朝の文學盛に行る |
| 平城 | 一五〇〇 | 大同 | | | | | | | |
| 嵯峨 | 一五〇〇 | 弘仁 | | 小野篁 | 小野空海 | 淺雲集 弘仁格 | 今樣 | 歌謠一變して催馬樂神樂歌起る |
| 淳和 | 一五〇〇 | 天長 | | 小野岑守 滋野貞主 | 經國集 文華秀麗集 令義解 日本後記 | 平假名成る 長歌衰ふ |
| 仁明 | 一六〇〇 | 承和、嘉祥、 | | | | | | | 刷詠行る |
| 文德 | 一六〇〇 | 仁壽、齊衡、天安、 | | 運昭僧正 | | 續日本後記 |
| 清和 | 一六〇〇 | 貞觀 | 大伴黑主 在原業平 在原行平 小野小町 | 都良香 紀長谷雄 島田忠臣 | 伊勢物語 竹取物語 | 文德實錄 貞觀格 | 物語（小說） |
| 陽成 | 一六〇〇 | 元慶 | 僧喜撰 文屋康秀 | | | | | | 白氏文集等世に行る |
| 光孝 | 一六〇〇 | 仁和 | 陽成天皇 光孝天皇 | | | | | | |
| 醍醐 | 一五〇〇 | 寶龜、天慶、 | | 淡海三船 和氣清麿 | 懷風藻 |
| 稱德 | 一五〇〇 | 天平神護、神護景雲、 | | | |

| 朝 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 宇多 | 一六〇〇 | 仁和、寛平、 | 紀望之凡河内躬恒 | 菅原道眞三卷清行 |
| 醍醐 | 一六〇〇 | 昌泰、延喜、延長、 | 壬生忠岑紀貫之紀友則伊勢 | 紀淑望 |
| 朱雀 | 一六〇〇 | 承平、天慶、 | | 菅原文時 |
| 村上 | 一七〇〇 | 天暦、天德、應和、康保、 | 源順、中臣能宣、大江朝綱、清原元輔、坂上望城、紀時文 | 大江朝綱 |
| 冷泉 | 一七〇〇 | 安和 | | |
| 圓融 | 一七〇〇 | 天禄、天延、貞元、天元、永觀 | 道綱母 | 大江匡衡 |
| 華山 | 一七〇〇 | 寛和 | | |
| 一條 | 一七〇〇 | 永延、永祚、正暦、長徳、長保、寛弘 | 清少納言、紫式部、藤原公任、和泉式部 | 具平親王 |
| 三條 | 一七〇〇 | 長和 | 赤染衛門 | |
| 後一條 | 一七〇〇 | 寛仁、治安、萬寿、長元、 | | |

| 朝 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 宇多 | | | | |
| 醍醐 | | | | |
| 朱雀 | | | | |
| 村上 | | | | |
| 冷泉 | | | | |
| 圓融 | | | | |
| 華山 | 拾遺集 | | | |
| 一條 | 枕草子、源氏物語、紫式部日記、和泉式部日記 | 和漢朗詠集 | 草子（隨筆） | 國文種盛の時代 |
| 三條 | | | | |
| 後一條 | | | | |

| 代 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 後朱雀 | 一七〇〇 | 長暦、長久、寛德、 | 源經信 | |
| 後冷泉 | 一八〇〇 | 永承、天喜、康平、治暦、 | 源隆國 | 藤原明衡 |
| 後三條 | 一八〇〇 | 延久 | | 大江匡房 |
| 白河 | 一八〇〇 | 延久、承保、承暦、永保、應德 | 藤原通俊 | |
| 堀河 | 一八〇〇 | 寛治、嘉保、永長、承德、康和、長治、嘉承 | 讃岐典侍 | 讃岐典侍日記、榮葉物語 |
| 鳥羽 | 一八〇〇 | 天仁、天永、永久、元永、保安 | | |
| 崇德 | 一八〇〇 | 天治、大治、天承、長承、保延、永治 | 源俊頼、藤原爲業 | 金葉集、大鏡 |
| 近衛 | 一九〇〇 | 康治、天養、久安、仁平、久寿 | 藤原顕輔 | 詞花集 |
| 後白河 | 一九〇〇 | 保元 | | 藤原通憲 |
| 二條 | 一九〇〇 | 平治、承暦、應保、長寛、永萬 | 藤原成通 | 本朝無題詩 |
| 六條 | 一九〇〇 | 仁安 | | |
| 高倉 | 一九〇〇 | 嘉應、承安、安元、治承、 | 源頼政 | |

| 代 | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 後朱雀 | | | | |
| 後冷泉 | 今昔物語、宇治拾遺 | 本朝文粋 | 歴史物語（栄史） | |
| 後三條 | | | | |
| 白河 | 後拾遺集 | | | |
| 堀河 | 讃岐典侍日記、榮葉物語 | | | |
| 鳥羽 | | 朝野群載 | | |
| 崇德 | | | | |
| 近衛 | | | | |
| 後白河 | | | | |
| 二條 | | | | |
| 六條 | | | | |
| 高倉 | | | | |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 安徳 | 一九〇〇 | 養和、壽永、 | 平忠度 | | | | | | |
| 鎌倉時代 | 後鳥羽 | 一九〇〇 | 元暦、文治、建久 | 藤原俊成<br>中山忠親 西行法師 後鳥羽天皇 | | 千載集<br>水鏡 今鏡 | | 短歌 今様 | 戰記文 隨筆 | 漢學衰へ佛教盛なり |
| | 土御門 | 一九〇〇 | 正治、建仁、元久、建永、承元 | 土御門天皇 藤原定家 藤原家隆 源雅經 源通具 藤原有家 | | 新古今集 保元物語 平治物語 源平盛衰記 平家物語 小倉百首 | | | 歴史物語（語り物） | 擬漢文出づ 漢語佛語多く國文に入る 和歌衰ふ |
| | 順徳 | 一九〇〇 | 建暦、建保、承久 | 宮内卿 順徳天皇 源實朝 鴨長明 | | 方丈記 | | | | |
| | 仲恭 | 一九〇〇 | | | | | | | | |
| | 後堀河 | 一九〇〇 | 貞應、元仁、嘉祿、安貞、寛喜、貞永 | | | 東鑑 新勅撰集 | 東鑑 貞永式目 | | | |
| | 四條 | 一九〇〇 | 天福、文暦、嘉禎、暦仁、延應、仁治 | | | | | | | |
| | 後嵯峨 | 二〇〇〇 | 寛元 | | | | | | | |
| | 後深草 | 二〇〇〇 | 寶治、建長、康元、正嘉、正元 | 橘成季 | | 古今著聞集 續後撰集 十訓抄 | | | | |
| | 龜山 | 二〇〇〇 | 文應、弘長、文永、 | 藤原基通 藤原基行 藤原光俊 | | 續古今集 | | | | |
| | 後宇多 | 二〇〇〇 | 建治、弘安、 | 藤原爲氏 阿佛尼 | | 續拾遺集 十六夜日記 | | | 日記 紀行 | |
| | 伏見 | 二〇〇〇 | 正應、永仁 | | | | | | | |
| | 後伏見 | 二〇〇〇 | 正安 | | | | | | | |
| | 後二條 | 二〇〇〇 | 乾元、嘉元、徳治、 | 藤原爲世 | | 新後撰集 | | | | |
| | 花園 | 二〇〇〇 | 延慶、應長、正和、文保、 | 藤原爲兼 | | 玉葉集 | | | | |
| | 後醍醐 | 二〇〇〇 | 元應、元亨、正中、嘉暦、元弘、建武、延元 | 僧元惠 藤原爲藤 | | 續千載集 續後拾遺集 | 元亨釋書 建武式目 | | | |
| 室町 | 後村上 | 二一〇〇 | 興國、正平、 | 源親房 卜部兼好 頓阿法師 花園上皇 二條爲定 二條爲明 | | 太平記、神皇正統記、徒然草、風雅集、新千載集、新拾遺集 | | 短歌 宴曲 舞曲 | 戰記 歴史 隨筆 | 和歌益衰ふ 今樣一變して宴曲曲舞起る |
| | 長慶 | 二一〇〇 | | 宗良親王 今川貞世 | | | | | | |

| 時代 | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 後龜山 | 二一〇〇 | 建德、文中、天授、元中、 | 二條爲忠松鶴房 | 連歌 | | | | | | | | | |
| 後小松 | 二一〇〇 | 永德、至德、嘉慶、康應、明德、應永、 | 二條爲重若崎三耶基 | 新後拾遺集、菟玖波集、菅記、狂 | 新撰古今集、櫻戰治要公事根元蘆川記 | 增鏡新菟玖波集 | 東常縁宗祇法師肖柏宗長 | 飛鳥井雅世一條兼良太田道灌 | 紀行 | 明國と交通す | | | |
| 稱光 | 二一〇〇 | | | | | | | | | | 連歌連歌盛に行る | | |
| 後花園 | 二二〇〇 | 永亨、嘉吉、文安、享德、寶德、康正、長禄、寛正、 | | | | | | | | | | | |
| 後土御門 | 二二〇〇 | 寛正、文正、應仁、文明、長亨、延德、明應、 | | | | | | | | | | | |
| 後柏原 | 二二〇〇 | 文龜、永正、大永、 | 山崎宗鑑荒木田守武 | | | | | | | | 連歌變じ俳諧起る | | |
| 後奈良 | 二二〇〇 | 享禄、天文、弘治、 | | | | | | | | | | | |
| 正親町 | 二二〇〇 | 永禄、元龜、天正、 | | | | | | | | | | | |
| 後陽成 | 二二〇〇 | 天正、文禄、慶長、 | | | | | | | | | | | |
| 後水尾 | 二三〇〇 | 慶長、元和、寛永、 | 烏丸光廣木下勝俊 | 類川藤孝 | 藤原惺林信勝 | 太閤記 | 徳川家康羅山文集 | 俳諧 | （和漢混和文） | 漢學勃興し、經史 | | | |



| 江戸 | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 明正 | 二二〇〇 | 寛永 | 小瀬甫菴竹中重門 | 石川丈山 | 豊鏡 | 覆醬集 | 發句 | 俗語 | 小說（通俗文） | 諸子百家皆行はる | | | |
| 後光明 | 二四〇〇 | 正保、慶安、承應、 | | 後光明天皇中江藤樹山崎闇齋 | | | | | 陽明派出づ山崎派出づ | 朱子派出づ | | | |
| 後西院 | 二四〇〇 | 明暦、萬治、寛文、 | 下河邊長流二井原西鶴北村季吟 | 熊澤蕃山伊藤仁齋朱舜水 | 扶桑拾葉集 | 本朝通鑑 | 今樣長歌 | （雅文註釋）（戀情小說） | 古義派出づ國學勃興す雅文盛に行はる | | | | |
| 東山 | 二四〇〇 | 貞享、元禄、寶永、 | 松尾芭蕉服部嵐雪近松門左衛門 | 新井白石室鳩巣雨森芳洲 | 木下順庵 | 七部集 | 大日本史 | 浮瑠璃 | 俳諧國語文學 | 和漢混和文完成す | 連歌變じ俳諧起て浮瑠璃復古派出づ | | |
| 中御門 | 二四〇〇 | 寶永、正德、享保、 | 荷田春滿有賀長伯 | 太宰春臺中井竹山伊藤東涯 | 經濟錄 | 鞜軒小錄 | | | | | | | |
| 櫻町 | 二四〇〇 | 元文、寛保、延享、 | 富士谷成章 | 荷川奥國 | かざし抄北邊隨筆 | | | | | | | | |

| 時代 | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 桃園 | 二五〇〇 | 延享、寶暦、寛延、 | 加茂眞淵 竹田出雲 | 柳澤淇園 | 萬葉考 雲泥雜誌 | | | | | | | 萬葉派起る |
| 後櫻町 | 二五〇〇 | 寶暦、明和 | 平賀源内 | 谷川士清 | 和訓栞 | | | | | | | |
| 後桃園 | 二五〇〇 | 明和、安永、 | 小澤蘆庵 本居宣長 | 山本北山 柴野栗山 | 古事記傳 | | | | | | | 折衷派出つ |
| 光格 | 二五〇〇 | 安永、天明、寛政、享和、文化 | 村田春海 加藤千蔭 宮保己一 松平定信 山東京傳 伴蒿蹊 橘南谿 太田南畝 | 瀧澤馬琴 柳亭種彦 式亭三馬 十返舍一九 | 頼山陽 太田錦城 中井履軒 | 琴後集 うけらが花 群書類從 花月双紙 近世畸人傳 東西遊記 梧窓漫筆 | 日本外史 | 狂歌 狂文 | 傳記 | 西洋の學術漸入る | | |
| 仁孝 | 二五〇〇 | 文化、文政、天保、弘化、 | 石川雅望 加納諸平 橘守部 香川景樹 藤井高尚 小山田與清 上田秋成 清水濱臣 平田篤胤 爲永春水 | 藤田幽谷 德川齊昭 佐藤一齋 齊藤拙堂 | 頼谷宕陰 成島司直 | 八犬傳 浮世風呂 膝栗毛 古史傳 近思管根集 八洲文藥 長歌獨格 德川實記 | | 狂句（歴史小說） （滑稽小說） | 水戸學派 小說流行 | | | |
| 孝明 | 二六〇〇 | 弘化、嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶應、 | 梁川星巖 | 岡本保孝 飯田忠彦 藤田東湖 佐久間象山 | 常陸帶 | 蝦夷玉集 桂園一枝 雅言集覽 | | | | | | 桂園派起る |
| 今上 | 二六〇〇 | 明治 | 物集高世 | 芳野金陵 安井息軒 | | | | | | | | |

# 附錄

## 歷代の漢詩文

### 第一、上古の時代

厩戸皇子

憲法十七條の一

四曰、群卿百寮、以禮爲本、其治民之本、要在乎禮、上不禮而下非齊、下無禮以必有罪、是以君臣有禮、位次不亂、百姓有禮、國家自治、

推古天皇聘唐帝國書

東天皇敬白西皇帝、使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解季秋薄冷、尊何如、想清念、此即如常、今遣大禮蘇因高、乎那利等往、謹白不具、

孝德天皇大化改新の詔は、文長ければ、こゝには載せず。

弘文天皇

五言侍宴一絕

皇明光日月、帝德載天地、三才並泰昌、萬國表臣義、

同述懷一絕　同

道德承天訓、鹽梅寄眞宰、羞無監撫術、安能臨四海、

山齋一絕　河島皇子

塵外年光滿、林間物候明、風月澄遊席、松桂期交情、

第二、奈良朝時代

春苑宴一首　大津皇子

開衿臨靈沼、遊目步金苑、澄清苦水深、晻曖霞峯遠、鶩波共絃響、哢鳥與風聞、群公倒載歸、彭澤宴誰論、

五言臨終一絕　同

金烏臨西舍、鼓聲催短命、泉路無賓主、此夕誰家向、

春日翫鶯梅一首　葛野王

聊乘休假景、入苑望青陽、素梅開素蕚、嬌鶯弄嬌聲、對此開懷抱、優是暢愁情、不知老將至、但事酌春觴、





在唐憶本鄉一絕　釋辨正

日邊瞻日本、雲裡望雲端、遠遊勞遠國、長恨苦長安、

初春侍宴一首　大伴旅人

寬政情既遠、迪古道惟新、穆々四門客、濟々三德人、梅雪亂殘岸、烟霞接早春、共遊聖主澤、同賀擊壤仁、

古事記序　太安萬侶

臣安萬侶言、夫混元既凝、氣象未效、無名無爲、誰知其形、然乾坤初分、參神作造化之首、陰陽斯開、二靈爲群品之祖、所以出入幽顯、日月彰於洗目、浮沈海水、神祇於滌身、故太素杳冥、因本教而識孕、土產島之時、元始綿邈、賴先聖而察生神立人之世、宴知懸鏡吐珠、而百王相續、喫劒切蛇、以萬神蕃息、歟議安河而平天下、論小濱而清國土、是以　番仁岐命、初降于高千嶺、神倭天皇、經歷于秋津島、化熊出爪、天劒獲於高倉、生尾遮徑、大烏導於吉野、列儛攘賊、聞歌伏仇、卽覺夢而敬神祇、所以稱賢后、望烟而撫黎元、於今傳聖帝、定境開邦、制于近

淡海正姓撰氏勤于遠飛鳥雖步驟各異文質不同莫不稽古以繼風猷於既頹
照今以補典教於欲絕暨飛鳥清原大宮御太八洲　天皇御世潛龍體元游雷
應期開夢歌而想寡業投夜水而知承基然天時未葵蟬蛻於南山人事共洽虎
步於東國　皇輿忽駕凌渡山川六師雷震三軍電逝杖矛奮威猛士烟起絳旗
耀兵凶徒瓦解未移浹辰氣沴自清乃放牛息馬愷悌歸於華夏卷旌戢戈儛詠
停於都邑歲次大梁月踵夾鐘清原大宮昇即　天位道軼軒后德跨周王握乾
符而摠六合得天統而包八荒乘二氣之正齊五行之序設神理以奬俗敷英風
以弘國重加智海浩瀚潭探上古心鋭煒煌明覩先代於是　天皇詔之朕聞諸
家之所賛帝紀及本辭既違正實多加虛僞當今之時不改其失未經幾年其旨
欲滅斯乃邦家之經緯王化之鴻基焉故惟撰錄帝紀討覈舊辭削僞定實欲流
後葉時有舍人姓稗田名阿禮年是廿八爲人聰明度目誦口拂耳勒心即勅語
阿禮令誦習帝皇日繼及先代舊辭然運移世異未行其事矣伏惟　皇帝陛下
得一光宅通三亭育御紫宸而德被馬蹄之所極坐玄扈而化照舟頭之所逮日





浮重暉雲散非烟連柯并穗之瑞史不絕書列烽重譯之貢府無空月可謂名高
文命德冠天乙矣於焉惜舊辭之誤忤正先紀之謬錯以和銅四年九月十八日詔
臣安萬侶撰錄稗田阿禮所誦之勅語舊辭以獻上者謹隨詔旨子細採摭然上
古之時言意並朴敷文構句於字即難已因訓述者詞不逮心全以音連者事趣
更長是以今或一句之中交用音訓或一事之內全以訓錄即辭理巨見以注明
意況易解更非注亦於姓日下謂玖沙訶於名帶字謂多羅斯如此之類隨本不改
大抵所記者自天地開闢始以訖于　小治田御世故　天御中主神以下
日子波限建鵜草葺不合尊以前爲上卷　大雀皇帝以下　品陀
御世以前爲中卷　小治田大宮以前爲下卷拜錄三卷謹以
獻上臣安萬侶誠惶誠恐頓首頓首和銅五年正月二十八日正五位上勳五等
太朝臣安萬侶

## 第三　平安朝時代

### 詠桃花一首

平城天皇

春花百種何爲艷、灼々桃花最可憐、氣則嚴兮應制冠、味唯甘矣可求仙、一香同發薰朝吹、千笑共開映暮煙、願以成蹊枝葉下、終天長樹玉階邊、

和左大將軍藤冬嗣河陽作　　嵯峨天皇

節序風光全就暖、河陽雨氣更生寒、千峯積翠籠山暗、萬里長江入海寬、曉猿悲吟誰斷得、朝花巧笑豈堪看、非唯物色催春興、別有泉聲落雲端、

故關聽鷄一首　　同

烽火不傳罷關城、唯餘長短曉鷄聲、孟嘗沒後年代久、誰客今鳴令人驚、

江樓春望應製一首　　小野岑守

春雨濛々江樓暗、悠々雲樹盡微茫、橋頭孤立一竿柱、湖口競入千許檣、麥隴新色荒村綠、楓林初葉釣家香、滔々流水何所似、四海朝宗歸聖王、

奉和王昭君一首（嵯峨天皇詩）　　良岑安世

虜地何遼遠、關山不忍行、魂情遶漢闕、形影向胡塲、怨逐邊風起、愁因塞路長、願爲孤飛雁、歲々一南翔、



奉和春日作一首　　有智子內親王

近來風日麗、萬物奢春光、烟輕新艸綠、林暖早花芳、餘雪落梅院、遊絲乘柳塘、鴻雁初遊渚、歸飛向朔方。

七言現果詩一首　　釋空海

青陽一照御苑中、梅蕋先衆發春風、々々一起馨香遠、花蕚相暉照天宮、

陶彭澤　　三善清行

心是盤桓身隱倫、自忘名字醉鄉人、歸來舟過三江月、出入門穿五柳春、園菊開時豐產業、林禽狎處得交親、野亭客到醅初熟、莫怪匆々脫葛巾、

不出門　　菅原道眞

一從謫落在柴荆、萬死兢々蹋蹐情、都府樓纔看瓦色、觀音寺只聽鐘聲、中懷好逐孤雲去、外物相逢滿月迎、此地雖身無檢繫、何爲寸步出門行、

七月一日　　島田忠臣

自去自來不復留、暗然空任歲時流、今朝何事殊驚愕、應是傷心第一秋、

仲秋釋奠聽講古文孝經　　菅原文時

一千八百有餘文、名是孝經忠不分、聽盡爲臣爲子道、秋風吹拂意中雲、

秋夜臥病　　都良香

臥病獨悽々、寂然人事疎、階前無履跡、門外斷賓蹊、忽歎浮生苦、寧知與物齊、形容信非實、魂魄恍如迷、夜久風威冷、窓深月影低、愛愁不能寢、長短聽鳴鷄、

偷見左相府宇治作有感　　具平親王

聞說山家素得名、風流超過漢西京、樵夫路近談王事、漁父歌閑慣雅聲、白浪頻翻秋雪亂、紅林半透暮雲橫、一吟佳句讃遊樂、初慰終年寂寞情、

仲春釋奠聽講左傳同賦養民如子　　大江匡衡

嗜文再作翰林主、橫劍更爲侍從臣、我后養民如愛子、就中侍讀異他人、

初冬遊泛西河　　藤原明衡

城西勝境一相尋、水上方舟幾動心、旅雁一行江霧透、寒猿三叫峽雲深、送秋岸樹紅留色、映月浪花雪有音、須卜幽棲居此地、泛遊自得忘淹沈、





〔原註〕以秋夜思政、何道濟民爲韻、依次用之、限三百字以上成篇、并序

對月獨詠　　大江匡房

三五秋天乘月興、心情彌動感方同、金環多落黃輿上、玉鏡高登玄蓋中、萬嶺降霜光遠至、一家散雪色遙通、桂華蕚草開生後、皓々蒼々昇碧空、

秋夜閑詠　　藤原忠通

秋夜詠吟何事好、管絃詩酒足相携、雛頭風暗菊花敗、墻下露寒竹葉低、燈爲照書儲座右、情依翫月入山西、幽閑窓裡夢方斷、欹枕如今聞曉鷄、

未旦求衣賦　　菅原道眞

閑茂之歲、後九月十二日、天子召見文章士十有二人於殿上、有勅曰、賦古詩之流、詩蓋志之所之、各獻一篇、具言汝志、詩云賦云、一文一字、不可風雲其興、不可河漢其詞、未且求衣、欲陳人主思政之道、塞霜晚菊、欲叙人臣履貞之情、臣等謹奉勅旨、避席議曰、穆穆焉、煌煌焉、濟濟焉、鏘鏘焉、古之所謂、謀于芻蕘、訪于臺隸之議也、臣某南郡罷官、北闕通籍、忝隨大夫登高之後、敢上小子狂簡之章、其詞曰、

運之遙遠者淳德明之至遲者凉秋、垂衣弗及、昧且相求、隨步驟而比蹤、無爲無事、顧澆醨以明目、雖休勿休、此焉廢寢、宜矣冥搜、原夫君馭黎元、下從造化、挾纊如與、問千里於寒溫、漱流不追、兼萬機於晨夜、神能降祉、道可高謝、仰玄鑒以來、祗望黃軒之往駕、於是庶幾至人之無夜夢、勞彤君子有闕飢、容光正襟、推赤心於微隱、暗室嬰禍、懷黔首於不欺、業乃勤也、天維顯思、當其時也、曉氛觸兮蕙帳芳、霜月低兮蘭燈映、褰裳以禮、悅其松栢有心、引領於賢、賤彼珠玉無脛、知人則哲、從諫惟聖、風雲感自四方、繩墨施于庶政、況復王臣蹇々、國老皤皤、戴星者不期而會、藏耀者其道自和、監寐去奢、則虎魄碎床頭之枕、悟言慎罰、則鷄鳴絕闕下之歌、義之之可必、事無奈何、故能嫌曳地於掖庭、警朝天於馳道、綺羅色薄、環珮聲早、次山龍而璀粲、能辨緝熙、分藻火以飄揚、執疑顛倒、懿乎四三皇、六五帝、紫宮高敞、乃心于以知歸、蒼海淼茫、方面於焉既濟、取諸行迹、眞之治世、其如是、岩廊垂拱、水陸輸珍、國可以爲花胥之國、民可以爲堯舜之民者也、

## 嘗家遺誡

## 嘗原道眞



凡仁君之要政者、以撫民爲本、民者神明質也、本朝之綱敎者、以敬 神明爲最上、神德之微妙、豈有他哉、凡本朝者、 天照大神之裔國、而 天孫瓊瓊杵之尊臨位之地、嘗禘祭之法、無可因漢土之法、齋卜兩家之氏人、以之預有司之員、凡神事之樞機者、以正直之道心事之、則神照降于此、玄至遊于此、故中臣鎌子神照之表曰、神明如水精、神德如池水、神明與神德分一、而無分一之理云云、凡治世之道、以神國之玄妙欲治之、其法密、而其用難充之、故夏殷周三代之正經、魯聖之約書、平素簪之冠之、服膺而當至其堺界、凡神器政器者、尋繹於有司之精、令掌其法規、假令雖有新古之班、更莫厭之、大鹿島之命爲祭主之時、神器及闕幣、則以眞榊之連葉爲平敷、以膳手之棄椀、令足其便、中大兄之皇子者、新冠不有其頭、則以眞木之群盤爲冠、向拜於 天皇焉、彼者神臣、是者儲王也、古蹟之影照、萬世之子臣、最以神而入玄者也、凡治天之君者、因準於先王之法、則太古之傳、和而治之、民無妖災天殤之苦、土無水旱蝗蛙之辛、矧於 神孫之皇國乎、與堯舜治天之德、其貴有其天孫、其樂有八十河原之神燎之神樂、凡神國一世

無窮之玄妙者、不可敢而窺知、雖學漢土三代周孔之聖經、革命之國風、深可加思慮也、凡國學所要、雖欲論涉古今、究天人、其自非和魂漢才、不能闖其閫奥矣

第四、鎌倉時代　見るべきものなし。

第五、室町時代

○　細川頼之

人生五十愧無功、花木春過夏已中、滿室蒼蠅掃難去、起尋禪榻臥清風、

○　後花園天皇

殘民爭採首陽薇、處々閉爐鎖竹扉、詩興吟酸春二月、滿城紅綠爲誰肥、

將赴若狹夜發山田浦　足利義昭

落魄江湖暗結愁、孤舟一夜思悠々、天公亦憫吾生否、月白蘆花淺水秋、

陣中作　上杉謙信

霜滿軍營秋氣清、數行過雁月三更、越山併得能州景、遮莫家鄉憶遠征、





## 源府君所藏銅雀研記　僧義堂

昔者魏曹操字孟德、初事後漢、爲丞相、及受漢禪、建都於鄴、建安十五年、創作銅雀臺、蓋鑄銅爲雀、置臺上、因以爲名焉、或曰、銅雀乃銅鳳也、而臺上有屋、百二十間、勢凌蒼穹、其上置宮妓、遺令曰、吾妓皆着銅雀臺、月朔、十五日、望吾西陵臺、及魏亡、臺廢爲墟、有里人耕其址者、往々得其古瓦、盛水爲研、爲世所貴重、由是文人題詠、登于史籍者多、今是研實其一也、初天龍長老春屋禪師、得之於海舶、獻于關東幕府、惟大人府君源公、天資文雅、每乘軍務之隙、從事翰墨、以文武兼資也、既得是研而甚喜、於是命工雕匣以藏之、鑄管以揮之、磨煤以研之、金貘以滴之、呼爲文房至寶焉、適出以示小比丘周信、命俾作記、余覩其瓦背、有銘云、建安十五年、其面上下亦有銘、上銘後云、紹聖元年、七月十六日、東坡居士書、下銘後則云、黄庭堅書、左右又有銘、名二行、古篆不可讀者數字、余退歸山舍、考之倭漢曆書、其曰建安十五年、即後漢末主獻帝、其年庚寅、當本朝女主神功皇后十一年也、曰紹聖元年、即趙宋第七主哲宗、其年甲戌、當本朝堀河院嘉保元年也、今遡

而推之、自建安十五年庚寅、至紹聖元年甲戌、八百八十四年、自甲戌、至今本朝貞治三年甲辰、凡二百七十一年、通計一千一百五十五年矣、其曰東坡居士、即蘇子瞻也、其曰黃庭堅、即山谷也、考之二公年譜、蓋東坡紹聖元年忤旨、有南遷之責、赴于惠州、舟中與山谷解后於彭蠡之間、而爲山谷作是銘也、惟夫漢之建安盡二十五年、而天下分爲三國、曰魏曰吳、曰蜀、而其統爲魏、魏亡而爲西晉、爲東晉、晉亡天下分爲南北兩朝、曰北朝則元魏也、北齊也、後周也、南朝則爲劉宋、爲南齊、爲蕭梁、爲陳氏、爲隋氏、隋氏也亡、而后唐興有天下者、二百八十八年、而降爲五代、曰後梁、曰後唐、曰後晉、曰後漢、曰後周、五代共五十六年、而天下歸於趙宋、宋治歷三百一十七年、而天下屬于蒙元矣、於戲、自漢以降、興亡治亂、山爲谷、谷爲陵、人物之更換、都邑之變遷、不啻千萬、而是研也、孑然獨存、不亦壽乎、或者曰、吾國遠彼鄴都、幾乎數萬里、而山負海阻、是研也、無翼而飛、無足而至、何也、曰、人君修德、則遠人歸、方物至、理必然也、惟我府君、果能修其德、以待物、則四夷八蠻之國、珠翠象犀之貢、威弗加而自服、譯弗重而自獻、豈止是研而已矣、但玩物喪志、則君子不取、

余既爲先府君玉岩坼公、作銅雀研記、後四年、以丁未四月廿六日、君薨于府第、年廿八、人咸惜其賢而不壽、既而遺命、薙髮著僧伽梨、與歸於瑞泉闡若、依佛氏葬法、而荼毗之、仍用唐魚軍容陪祀南陽忠國師故事、祔于開山正覺國師之右、則研遂藏于此矣、而不肖皆預其事、及永和首夏、方今古天誓禪師來、自雒都、主是席、時適以唐人李氏作銅雀臺圖、獻于今令嗣府君左典厩公、公喜而寶藏之、余一日入府、求觀其圖、乃見鳳鳥翠然跨屋脊、如前記云者矣、而上有江南當代儒釋名勝題詩者五人、其釋仲銘新公詩、最可觀也、曰銅雀煌々鄴水湄生靈塗炭國分離、土階三尺茆茨下、鑿井耕田總不知、蓋以戒奢侈也、余既退靜而思之、凡物之隱顯離合、皆有數而存焉、今是研之興、壽並銅雀、而相次爲吾府君賢父子之所有、若冥符焉、豈非有數者乎、余遂併志、以附于銅雀研記之末云、歲乙卯冬十月、釋義堂某書於在城西門保壽精舍、

## 第六、江戶時代

杜鵑　伊藤仁齋

四月空山聲初悲、美人枕上夢先知、曉來何處情尤切、雨歇雲開月霽時、

園城寺絕頂　同

山行六七里、往到杳冥中、船遠閒々去、天長漠々空、嶺環邨落北、湖際寺門東、男子莫徒死、請看神禹功、

寄題豐王舊宅　物徂徠

絕海樓船震大明、寧知此地長柴荊、千山風雨時々惡、只作當年叱咤聲

早春眺望　同

幽丘黃鳥此携壺、晴霽丹梯瞰大途、無數樓臺遙似畫、誰家車馬俯堪呼、三山海靜春雲細、一嶽天橫白雪孤、形勝東都元氣象、和烟昨日滿城隅、

挽菲靖木先生　新井白石

四馬蕭々送葬車、古原霜落白楊疎、大名私議門人諡、原德應傳國史書、爲志我開三代飾、築塲誰結六年廬、自今弟子如星散、共是離群嘆索居、



早春郊行　伊藤東涯

閑身不是官遊人、步出郊東值早春、春樹依々嵐未軟、烟霞何處覓芳辰、

登白雲山　太宰春臺

白雲山上白雲飛、幾戶人家倚翠微、行盡白雲々裡路、滿身還帶白雲歸、

夜下墨水　服部南郭

金龍山畔江月浮、江搖月湧金龍流、扁舟不住天如水、兩岸秋風下二州、

楠子墓　紀平洲

忽入君王夢、殊恩一見招、英風蒙北地、忠烈動南朝、死守千秋節、名成百代標、如何將星落、廟畧遂寥々、

八島懷古　桂山彩巖

海門風浪怒難平、此地曾屯十萬兵、金鏑頻飛魚鼈窟、樓船空保鳳凰城、宋帝遺臣迷北極、周王君子悉南征、不識英魂何處所、月明波上夜吹笙、

和桂彩嵒見寄　梁田蛻嵒

郡城東野渺烟波賈客風帆奈我何萬里書來憐白髮更教霜色爲君多

祇園南海

漁家月

身寄扁舟萬里波秋深烟渚月明多酒醒不覺風霜冐夢宿蘆花雪滿蓑

室鳩巢

淡路島

炎荒地坼海門開中有微茫仙嶼回鰲背日蒸金闕出龍宮潮起雪山來蒼梧慘澹帝陵樹綵石動搖天柱臺舟楫未因冥討去坐看飛鳥入烟埃

雨森芳洲

中秋無月

灝氣蒼茫暮色浮誰教明月暗中流透簾燭影千家靜泣露虫聲四壁愁野斷天涯難命酒興闌武鎮怕登樓半錨茶冷坐長夜應惜枉經一度秋

藪孤山

赤馬關

長風破浪一帆還碧海遙廻赤馬關三十六灘行欲盡天邊初見鎮西山

柏木如亭

木母寺

隔柳香羅雜沓過醒人來哭醉人歌黃昏一片離蕪雨偏傍王孫墓上多





芳山懷古

賴杏坪

万人買醉攪芳叢感慨誰能與我同恨殺殘紅飛向北延元陵上落花風

芳野懷古

藤井竹外

古陵松柏吼天颸山寺尋春春寂寥眉雪老僧時輟帚落花深處說南朝

春郊

菅茶山

春郊絲管日喧々亦喜吾徒幽事繁問字頻過揚子宅送茶時叩玉川門樓臺四百八十寺花外東西南北村千里游蹤一肱夢病懷徙倚向誰論

詠史

賴山陽

蜻洲在手打爲丸黃鉞東西試錯蟠漢將猶存奴僕面楚人誰道沐猴冠亂窮草莽英雄起志大夷蠻肝膽寒二世休嗤秦業短混同六國太艱難

蒙古來

同

筑海颶氣連天黑蔽海而來者何賊蒙古來來自北東西次第期吞食嚇得趙家老寡婦持此來擬男兒國相模太郎膽如甕防海壯士人各力蒙古來吾不怖吾

怖關東令如山直前斫賊不許顧倒吾檣登虜艦擒虜將吾軍賊可恨東風一驅附大濤不使殺血腥日本刀

一谷懷古　梁川星巖

二十餘春夢一空豪華吹散海暝風山排殺氣參差出潮迸寃聲日夜東憶昔滿宮悲去鵠欲將往事問飛鴻爛斑剩見英雄血塹樹鵑啼朶々紅

出郊　大窪侍佛

一路晴郊扶杖出客懷蕭索對昏鴉孤村流水六七里殘照斷煙三四家經兩多時爪已熟入秋數日稻初花看驚病過中元節故國墳塋草定遮

安部仲麻呂望月圖　村上佛山

三笠山頭一輪月孤舟海上欲歸人千秋只有清輝在應識晁卿非叛臣

筑前城下作　廣瀨淡窓

伏敵門頭浪拍天當時築石自依然元兵沒海蹤猶在神后征韓事久傳城郭影浮春浦月絃歌聲隱暮洲煙昇平有象君看取處々垂柳繫賈船





述懷　藤田東湖

三決死矣而不死二十五回渡刀水五乞間地不得閒三十九年七處徙邦家隆替非偶然人生得失豈徒爾自蕪塵垢盈皮膚猶餘忠義塡骨髓嫖姚定遠不可期丘明馬遷空自企苟明大義正人心皇道奚患不興起斯心奮發誓神明古人有云斃後已

守產解　頼山陽

某里有一富家分產其子弟族黨使別植產至其後也族屬之猾者侮其孤寡稍褫之其家以衰其西隣又有富家懲東隣也乃務豐强其家弗分產也及其死也豪奴悍婢脅其孤而不忌外盜穴壁而入悉其財而去其家遂滅東鄰爲姬爲李爲劉之始西鄰爲嬴爲曹爲曲午爲揚爲趙爲奇握溫爲朱較諸茲平安也鎌倉也安土也西鄰類也室町也浪速也東鄰類也二家孰是曰不分產無以破奴婢之心而禁盜之志也不强家無以制族屬也二者具矣庶乎保其富乎

遊箕面山途入京記　齋藤拙堂

余在攝既浹辰、遂將入京久聞箕面之勝冠於幾甸、謀迂路過觀、二十七日下午、發大坂、東北渡長柄川、行五里、至山下、盤廻而上、則淨境別開、清溪奔駛、紅欄橋架焉、此間竹經松緯、一往幽折、心甚樂之、但日昏黑、寺門閉矣、投宿門前茶店、背即溪、終夜有聲、琅然到枕、明且門開、至觀音堂、稍前、左右有磴、左爲行者堂、右爲辨天宮、並宏麗、合名之、曰瀧安寺、滿山皆楓、爛然飽霜、色如渥丹、綺錯水巖之間、時有墜錦點波、杳然流去、談者多言、其勝在高雄之上、意然、出後門、沿徑而行、楓盡松來、水窮石出、有巨巖竦峙、大如夏屋、曰唐人戾、戾之爲言反也、相傳昔有外國人來遊、至此畏險反去、故名、更進聞大聲、鞳鞳震山谷、徑轉、望見瀑布掛絕壁、長可二百尺、濆珠飛空、跳擲而下、至潭底、復逆上、轟然雷動、有一佛堂、而瀑登觀焉、凜然魄悸、不能久留、而去、聞近幾瀑布以那知爲第一、此瀑亞之、想當然、且此瀑直下、略不遲回、比之曳布瀑曲折而下者、其勝各異、曲者委蛇著態、小品之文也、直者奔放怒勢、大篇之文也、或謂文貴曲而賤直、非通論也、全觀二瀑、而知文有大小之別矣、自堂右躡磴而上、出瀑頂、々凹蓄碧、方三丈、上流灌注、底深不測、蓋瀑





之源也、從後門至此、凡十八町、又一里許、至勝尾寺、中堂安觀音大士、爲西國三十三所之一、出前門、下阪五十町、至郡山、遂北上入京、數日往遊高雄及東福寺、兩地之楓冠於都下、號稱勝區、然余終不能忘箕面之勝矣、

## 加藤公贊　　鹽谷岩陰

勇蓋三軍、忠奉一姓、不以衆寡動氣、不爲盛衰改行、剗復治兵濟寬猛、立德該智仁、措勝在手、量敵如神、豈惟一槍之雄、寔是百將之冠、所以殊域異類畏之如夜叉、愛之如慈親、奈何宗祀二葉而殄、威靈千載獨新、猗嗟浩氣之塞、凝爲神祇、偉人之精、箕尾之騎、若公之靈、其莫有、遂勃軒騰、六五紳而四三台矣哉、

## 題蘭相如奉璧圖　　安井息軒

眇然小丈夫而已矣、力不足以維雞、貌不足以加人、而英氣一發、滿堂摺伏、以秦政之暴、不得少折其節、終完璧以還、甚矣、氣之能伸萬物之上也、然氣生於志、志奮於義、義苟失矣、匹夫猶且侮之、安能逞於虎狼之秦哉、相如唯知此義也、故他日屈於廉頗、如四體無骨、亦能使頗肉袒謝罪、而趙國賴以安、世之悻悻者、獨知

其折秦、而不知其所以能折之、則別有在焉、抑末矣、

# 中等國文學史附錄 終



明治三十四年五月廿五日印刷
明治三十四年五月廿[illegible]日發行

定價金六拾錢

編者　大林弘一郎　靜岡市西草深町二百三十九番地

發行者　株式會社國光社　東京市京橋區築地二丁目二十一番地

右代表者　西澤之助　東京市京橋區築地二丁目二十一番地

印刷者　河本龜之助　東京市京橋區築地一丁目十八番地

不許複製

90
176

084929-000-2

90-176

中等国文学史

大林　弘一郎／編

M34

DBB-0216